
本まみれの哀れな転生者

ピエロトニワトリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本まみれの哀れな転生者

【Nコード】

N0934X

【作者名】

ピエロトニワトリ

【あらすじ】

本が大好きだった埋もれて死ぬほどに、そんな彼は巨大な図書館に転生した、そこにいた女性からの話では神様によって、物語の続きが見たいからこの世界に飛ばされたのであると告げられる。しかし、現在の身長は五センチであった。理由は心が小さかったから本を読んで能力を覚えていくお話です。

1 死で人生の始まり

ここは俺の家であるこんな素晴らしいことがあるだろうか。サラリーマンになり、小説家になった俺は今沢山の本の下敷きになり。死に直面しようとしていた。なぜこんなことになったのか、遡ること二分钟前。

二階建てのこの木造小屋は俺のお金で新築した。二階に数万を超える本を蓄積していた。俺は二階で小説を書きながら寝落ちしていた。気づいたとき地響きが鳴り響き、地面に叩きつけられた。棚から溢れる本たち。わっさわっさ。本に囲まれ、本が鈍器のように叩きつけてきた。なんじゃこりゃああ。台所に落下した俺は数万冊の本の下敷きになり死のうとしていた。笑っちゃうよね本が好きだった。俺は天涯孤独である。大事な人も大切なひともない。両親は病気で死んでいるそんなとき俺に微笑みかけたのは本であった。

今思えば誘惑だったのだ。その強大な誘惑に俺は負けたのである。サラリーマンの仕事は辛かった首になるまではのほほんとやっていた。そんな俺は本にどっぷりつかって小説家になった。売れていない方だと思う。そんな俺は今死のうとしている。

夢ならあるさ強大な小説家になることさ。

夢なら抱いたさ、沢山の小説を読むことさ。

本に囲まれ死のうそれが俺の人生さ。

目を閉じて目を開ける。そこに広がっていたのは信じられない光景であった。

数百万の本が無数にひしめいていた。棚は数百列あり、したから上まで二十棚はくだらない。ここの本が一望できるカウンターで俺

は寝ていた。

当然というか当たり前、カウンターの女性に払い落とされたのである。巨乳ロングヘアで緑のローブのお嬢さんは漆黒の髪の毛をしながら、つんとした目付きでこちらをにらんでいた。

「あなたは誰？」

「俺は出山本保だよ、本のことならお任せのホンポだよ」

「それでなんのようどこに転生したの？」
「何って」

転生？

その言葉に俺は啞然としていた。何って。俺はというか！ この女性巨大だ。ちよまて巨人か？

なんじゃこりやあああ。

「巨人？」

「あなたが小さいのよ」

「どういうことだ」

「この小説だと気持ちの小さな主人公が小説を書いていたは、サラリーマンだとかよくわからない専門用語使ってね、彼はいつも心が小さかった、で！あなたのことね」

「どこから、でなのどこまでが、で？ なの」

「だからあなたが心小さいからそんなに小さいのよ」

「って五センチ位しかないじゃないですか」

なんの因果か近くに定規があつたので測ってみた。ってここは虫籠じゃないですか、払い落とされても無事なわけだよ。

「なぜかしらね小説を読んで主人公が飛び出る何てまれにないんだけどね、予想されるのは神様があなたの物語を見たかったからね」

「どんな予想だよ」

「あら失礼しちゃう、こう考えて、神様がいたら、沢山の人がいたらひとつの世界に住まわせるでしょう」

「そうだな」

「知ってる？ 本一冊に神様が一匹宿るの」

「一匹って一人じゃないのかよ、それなら俺の部屋には数万の神様がいたのか」

「そういうことね、本の下敷きになって物語が終わる。しかし、神様は物語の続きが見たかった。だから、この世界に飛ばしたのねこれは推測にすぎないけど、この世界は他の世界の本を取り入れることをしているの。方法は自分で調べてね」

「その神様って本当にいるの」

「誰も見たことないそうよ、単なる妄想かもしれない、そうじゃないかもしれない、単純な世界の真理だからね、でも違いかもしれない、それはあなた自身で確かめて、私の名前はブアンビーよ、よろしく」

「ああ、よろしく、というか！ 虫かごから出せ」

「条件があるわ、あなたに仮説の実証をもらうの」

彼女の微笑みは不気味な学者のようでもあった。

1 死で人生の始まり（後書き）

このお話は小説を読んで主人公が強くなるチートみたいなお話です。もちろん図書館での仕事や図書館にやって来る人の頼まれ事や、戦闘シーンもあります。次の話までご期待を、上手な文章ではありませんがどうぞよろしくお願いいたします。

2 読書で能力を覚える（前書き）

ここで主人公のメイン武器が登場します、さてどちらでしょう。

2 読書で能力を覚える

「では私が用意する本を読んでください」

「そんなものは容易だぞ」

「ではお願いします、仮説の実証ですから」

それから俺は彼女に言われて本を読みふけた。虫籠からでて大きな本を一生懸命に捲った。物語は面白かった。

『大きくなる見栄の張り方』という本である。大きくなるには？とか思ったり。

心を大きくするためにはと考えさせられるほどに魅力的なはなしであった。不思議な小説だ俺が小さいと思ってても体が大ききなる錯覚を覚えるのである。なにかが脳内に響いた。

ー大きくなるー

を覚えてたらしい。

というか！何かのゲームなのか大きくなるを覚えてくらいで大きくなれるか！。

そして俺は大きくなると呟いたのである。

ミシミシビシビシと音になり、巨大化した俺は素っ裸で、ブアンビーの前に座っていた。只今説教中、なぜか彼女は男性の裸に耐性がなかったらしい。俺は茶色の布の服をもらってやっともとに戻れたのであった。

ー小さくなるーを覚えておりますが使用しますか？

誰が使用するんだ！絶対に使わないぞ脳みその言葉は恐ろしい。

「ということで仮説が実証されました」

「どんな仮説だ」

「あなたは本を読むことによって強くなるのです」

「そんな仮説俺のドストライクじゃないか」

「ここからが本題です、あなたはここで働きませんか、能力を覚え
て、この図書館で暮らすのです」

「いいだろう、暮らせてください」

「では本を読んでください、この本です、読み終わったら言ってください。ここでの仕事を売るのに必要なことです、今日は休館日です
のでご安心を」

それから俺は本を読みふけたのであった永遠と続けばいいなと願う本づくしに俺は死んでもよかった。もう死んでるけどね。『掃除の仕方』『算の使い方』『水魔法の歴史』を眺めたのである。俺は
以外と読むスピードは速い方だと自負している。やっと読み終わると、太陽が沈んだのが窓から見えた。覚えたのは以下の通り。

―掃除をする―

―算を使うレベル1―

―水魔法レベル1―

なぜ算にレベルがあるのかは謎であったが、ようやく娯楽を終え
ると巨大なお風呂に叩き出されてひとつぶろあびるのであった。

「あなたの臭いは本よりきついです」

が、彼女の言いぐさであった。石鹸で体をごしごしと洗うと。色々
と考えさせられてしまう。こんな楽園みたいなところにいつまで

いるのだろうか。

でも不思議と恐怖よりもワクワクが先にたった。

風呂を終えると、パンとスープを食べて、ゆっくりと眠った。目が覚めると、箒を持ったブアンビーが、おそって来て、仕事をしろと言われる。まだ朝の四時なのに。

「いいですか図書館の仕事は朝から始まるのです。掃除が終わったら、机においてある本を読むように」

「了解しました教官」

「私は鬼軍曹です、ちょっと試みてみたかった、えへへ」

「可愛いです、鬼軍曹」

「さあ仕事ですよ」

掃除をするを使用した。脳みそに掃除の仕方が流れてくる、そこから掃き掃除を選択すると自動機械のように勝手に仕事を始めた。埃の群れが襲ってくる箒裁きで回避すると次にまた埃がやって来るこれを数度繰り返し、巨大な図書館を掃除した汗である。時間は九時である。お客さんが群れのように入ってきたのは、ちょうど掃除が終わった頃であった。

「箒を使うレベル201になっていたのはおどろきでどこに箒を使って戦うのか疑問であった。」

本を読むとしたとき、奥の本を探すのにランプを使っていたおばさんが地面にランプを落とし、火がもえあがった。俺は水魔法を使って、沈静化した。おばさんはブアンビーに怒られてしゅんとしていた。

このときのために覚えさせたのか。

「水魔法レベル2」になっていた。

それから俺はまたまた本を読みふけた。ブアンビーは図書館の受付で貸し出しをしていた。

俺はまた覚えた。本の内容は『警察は見た』である。俺の世界のお話であった。

「観察力」を覚えたそうで意識を集中させると、図書館の地図が頭に入ってきて人の位置だとかがすぐにわかった。観察力の力は恐ろしかった。人が本を選ぶところまで見えてしまう超能力のようで驚きを隠せない。次の本は『本の戦い方』であった。俺はこれを覚えることに違和感を覚えていた。

「本レベル1」

本ということは使えば上がるのだろう。どう使えと？

そのときである悲鳴が上がった。そこには剣を持った男が暴れていた。二名ほど手から血が出ている。

「金を出せ」

俺は分厚い本をもって駆けつけて、向かい合った。本を握り、走って振り落とした。本が男の顎を砕き倒れてしまった。なんとか生きていたが自然の流れのように動いたのである。男はピクピクと震えている。

それから警備の人がやって来て謝礼金2銅貨を渡して男を連行した。俺は途方にくれながらただ。見つめていた。

ー本レベル5ーになっていた。もしかしてブアンビーは本で戦えと言っのだらうか？

2 読書で能力を覚える（後書き）

メイン武器が本なのかそれとも筭なのかもう決めています。まあ両方でもいい気がします。図書館でしごとしながら強くなるお話を書きますのでよろしくお願いします？

3 図書館のお仕事よりも読書がいいのは夢（前書き）

算のペン回しを想像すると結構難しそうだったりします。普通はで
きませんよね。

3 図書館のお仕事よりも読書がいいのは夢

俺の人生は三日飯を食わずとも小説さえあれば生きていけるという男であった。毎日が天国のように過ぎていく。それは終わり今生き返ったからだで図書館のお仕事をしているのである。強盗を本で退治した俺は、余った午後を飯抜きで本を読んでいた。

なんとという至福の時『料理の作り方』を眺めながらなぜ彼女はこんなものを見せるのか謎で仕方なかった。

「料理レベル1」を覚えたのはお約束であった。それにしても老人のシェフはかつこよかったな。

よし次はなににしようかな。

『指揮者の仕方』を読んでいくこの小説はなんでも指で指せば動かせる超人を描いていた。

「指揮者になる」

これはレベル制じゃないみたいである。そして夕方になる頃、図書館が閉まった。ブアンビーがこちらにやって来て本を取り上げて、仕事よと言う。

はてどんな仕事だろうかと思ってついでにいくと。台所に案内されたのであった。

「基本的に私はパンとスープしかつけれないの料理はあなたの仕事よ」

「何でお前が作らないんだよ、パンとスープでもいいぞ」

「私が嫌なのよ」

「わがままだな」

「結構、ここに食材があるからね」

彼女が立ち去りホンポシェフは考えた。何を作ろうか、そこで指揮者の力を使って包丁を二本指揮しながら、キャベツの千切りと、ジャガイモのかわむきを同時にこなすのである。ジャガイモをなべでことごと煮て、きゃべつをのせるとはい出来上がりいもサラダ。

次はそれをパンではさみサンドウィッチのできあがり。二人分用意して、持っていく。

「料理レベル3ーになっていた

一緒にもくもくと食べていると彼女が微笑んで呟いた。

「合格よ、今日の仕事は終わり図書館で好きな本読んでいいわよ明日になったらまた働いてもらうから、一日に勝手に読んでいい小説は二冊だけよ、これ以上一気にに習得するとバランスが崩れるのよ」
「なるほど、わかったぜいやっほおう」

それから俺は図書館で吟味に選りすぐりの本をようく選んだ。ほうほう、なるほどね。

では説明しよう俺が選んだ本は『透明人間』『勇者の最強技』であつた。ゆつくりと眺めていく頭のなかに物語が侵入して楽しいなんて至福の時なのだろうか、ここまで来るのに本の下敷きにならないといけないうんて厳しすぎる。

俺の人生はこれからだ。まだまだ。やり直せる。そんなこと思っ

て本を読みまくったのであった。

ー透明化ー

ー勇者の技レベル1ー

これを習得して、早速行動にうつす。まずは透明人間になり、衣服を脱いで、風呂に向かう、もうわかっただろう。あの巨乳を目撃するのだ。男性諸君の歓声と共に進め。風呂に入って十五分で素っ裸のブアンビーがやって来た。うおと思った瞬間、やはりタオルを巻いていた。そして、いきなりからだがしびれて動けなくなった。

「なにさらしとんじゃあああ」

「ちょまてまて」

ここからは皆さんのご想像にお任せます。血まみれとなった俺は虫の息で倒れていた。どうやら気配までは消せないらしい研究をしよう、いつかあの巨乳を、この眼で眺めてやる。男の不埒な考えはほっておいて。図書館の外に出て、体を構える。図書館の外は真っ暗で森がそびえていた。やはり図書館は巨大であった。

どのくらいでかいかというと、野球をするドームくらいのでかさである。

ー勇者の技レベル1ーをしようする。手を構えて、ぐるんと回る、手がなにかを求めている、しょうがないから近くにあった本をもつて振り落とす。岩が砕けた。そこに岩があれば壊したくなるだろう？

その本はさつき読んだ料理の本であった。どうやら彼女がここに置いて見つめていたのだろう。あの岩は固かった。さて寝るか。図書館に戻って部屋のベッドで眠った。

朝目覚めると、そういえばあの料理の本は外に出しっぱなしにしたが大丈夫だろうか。心配しながらカウンターにいけば置いてあった。安心して、カウンターで眠っているブアンビーを起こすと。

「そういえば昨日おじさんの駄作の銅像が粉碎されてたは」

「それって岩みたいなのやっ」

「そうよ心当たりがあるの？ 白状しなさい」

「いや、知らないな」

そのときである四時を告げる金が鳴り響いた。

「昨日鳴ったか？」

「あなた寝てたわよ」

なるほどねこのおとは結構いいだろう、お客さんが来る前に掃除を済ませよう。箒を片手に、もうスピードで動いた。昨日より箒さばきが格段と上がっている。ペン回しのように箒回しができる。意味あるのか？

箒は杖のように使ってはならない。そんなことを思って俺は箒を使っていた。

八時ごろに掃除が終わった。

ー箒を使うレベル30ー

どこまで上がるか結構なぞだけどね。俺は新しい仕事を言われないうちにむしゃくしゃしていた。もっと使ってくれと願うのである。

「これ読んでね次の仕事に関係あるから」

「任せろ」

そして、俺は本を読む、そこに本がある限り読むことをやめない
さてどんな本だろうかね。

『家政婦は見た』 『おばちゃんの説得』

この二冊にブアンビーが何をさせたいのかわからなくなってしま
った。

3 図書館のお仕事よりも読書がいいのは夢（後書き）

次の話で『家政婦は見た』『おばちゃんの説得』の意味が解明されます。拙い文章ですがよろしくお願いします。

4 万引きと図書館の防衛（前書き）

お気に入り登録してくれた方、本当にありがとうございます励みになりました。これからもよろしく願います。

4 万引きと図書館の防衛

開館が始まったお客さんが雪崩のように図書館に入ってくる、いつみても繁盛するな。

『家政婦は見た』はこのような技になった。

―視線強化―

である。これがなんの役に立つのかはまったくわからない、次の本を手にとって読みふける。暖かい気持ちになって読もう。

『おばちゃんの説得』は、

―交渉レベル１―になっていた。これもなんのために使うかはわからない。

次の小説は？ 俺に本がないタイミングなんて信じられない、次は！！と唸っていると。視線を感じた。そこを見るとおばちゃんが本をバッグにひっそりしまっていた。なんだこれ？ 万引きか！ 図書館にも万引きってあるんだ。

俺はブアンビーと視線でやり取りしようとしたけど、そつぽを向いていた。そりゃないよ。

俺は冷静になりながらもゆっくりと立ち上がった。おばちゃんが入混みの中に隠れて逃げようとしている。俺はおばちゃんの肩を叩いた。

「わかってますね？」

「うるさいわねこのへんてこりんめ」

そのおばちゃんはあまりにも無礼であった。彼女のバッグから無理やり本を取り出す。

「それ図書館の本受付でね」

「うるさいわねこの不細工が」

このおばちゃん俺のいたところついてくるな。ちょっとショックでしゅんとしていた。いきなりおばちゃんが懷から本を取り出した。まだ本を隠し持っていたのか！おばちゃんが襲ってくる。

俺は柵から本を取り出して向かい合う、本vs本である。本と本が火花を散らす。俺は「交渉レベル1」を使ってみる。

「おばちゃん息子のかおを试试看ろ」

「息子なら戦場で死んだわ」

「おばちゃん夫の顔を見てみる」

「夫なら天国よ」

「おばちゃんちょっと来てくれ」

「いやよ」

おばちゃんの本と俺の本が交差して、ぐるんとおばちゃんが回転した。右頬をかすった。このおばちゃん何者だ。本を構え、ぶつか。おばちゃんがバクテンしたけどすげえ。おばちゃんがぜいぜいといって倒れた、年には勝てなかったみたいだ。

「本レベル10」

そんなのどうでもいいよ。ということで俺はおばちゃんを事務室につれてきた。おばちゃんは座ってこちらをにらんでいる。すごい目付きだよ。

「まあ、カツ丼を食べなさい」

「見たことない食べ物ですねあなたが食べなさい」

「すまないな昼飯まだだったんだよってじゃなくて、あんたが食べるの交渉の基本だよ？」

どこかの刑事がよと突っ込む。

「ふんそんなこと、あつあつ」

「って食ってるんかい」

おばちゃんはカツ丼をあつあつしながら食べていた。ここには豚もいるし卵もあったから作れたのである。倉庫に材料があった。

よだれが垂れている。見るからに痴呆ぎみの老婆という感じである。だが、おばちゃんは上品にハンカチでぬぐった。

「美味しくいただきました」

「で、おばちゃんなんで盗んだんだ？」

「お金に困ってまして、夫が病気で」

「あれ？ 天国じゃなかった？」

「あともうすこしで天国で。ここにある本をすべて売ればなんとかなります」

「おばちゃんそれ、すごい遠い夢だよ」

「でもこの一冊でなんとかなるので売らせてください」

「そりゃダメなんか仕事ないの」

「王宮でメイドをやっていましたけど首になりました」

こんなおばちゃんなら首になるわな。

「他の仕事は探さないの？」

「誰も雇ってくれません」

「あんた夫いないだろ」

「ばれましたか」

―交渉レベル2―

なんか上がったし。

「おばちゃん白状しな」

「何をですか、しょうがないですね私の名前はルーサーよ」

「なにげに男性っぽいし」

「わるいかしら、両親が男性と間違えたそうよ」

「なんかかわいそうだな」

「かわいそうじゃないわよ、あなたどうするの？ 煮るなり焼くなりしなさい」

「あいよ」

いきなりブアンビーが登場した。

「話は聞いたわよルーサー、あなたここで働かない？」

「ブアンビー様」

「だってあなた王宮で首になったんだって？ 聞いてるわよ、それならここで働きましよう、私とこの下僕だけじゃ頼りなくて」

「下僕じゃねーよ」

「あら違った？ 何様なの？」

「すみません下僕です」

「わかったはブアンビー様、今日のところは引き下がります」

「そりゃこっちの台詞だ」

「だまらっしゃい下僕」

「おばちゃんに言われたくないよ」

「考えておきますので、この本をもらってもいいですか」

「まだ諦めてなかったのか」

「本をぬすんだら警備のひとにつきだすわ」

「なんと殺生な」

「あんたが悪い」

俺の呟きにルーサーは黙った。いきなりこちらをにらみ、机を叩いた。何だ？

「交渉レベル５」

そんなことどうでもいいんだよ。

「いいわ私を働かせてちょうだい、最低賃金は渡してもらおうわよ」

「もちろんよ一日五十銅貨ね」

「あれ？ 俺もらってないぞ」

「うるさいわね下僕」

ひどいというか。

「ルーサーあんたに言われる筋合いはねーんだよ」

当たり前の突っ込みであった。

俺はそのあとルーサーが仕事を教えられているのを眺めながら、本を読んでいた。なんと言う平凡さだろうか。ルーサーの仕事は返品されたやつを本棚に返す作業である。これが以外と難しく、番号順、著者順、名前順にしくちやならない。俺はただぼんやりとして本を眺めていた。次に与えられた本はというと、『箒の使い方

上達編』『本の戦い方上達編』 いったい何をさせたいんだ？

レベルが上がったようである。

― 第の使い方レベル50 ―

― 本レベル20 ―

ちよつと驚異的である。

いきなり、図書館に二十名ほどの不良集団がやって来た。みんな痩せ細ろっている。全員が狼の耳をしていた。

全員が同時に剣を引き抜いた。錆び付いていた。

本を見ているお客さんたちは平気そうにしている。

気づいたんだけどさこの図書館って治安悪くない？

今までブアンビー、一人でなんとかしていたのだろう。ということとはあの風呂のぞき血祭り騒ぎでわかったこと。ブアンビーはとてつもなくつよい。それも恐ろしいほどに、こいつらわかってるのか。

「おいこら金出せ」

「あなたたちで二件目ですよ」

― 交渉レベル5 ― を使う。

「お兄さんもうちよつと命を大切にしよう、お天とうさんがかわいそつだよ」

「俺たちには神はいない、俺たちにはくそつたれ」

交渉失敗。― 視線強化 ―

ここで『家政婦は見た』が適用された。

俺は右手に本左手に箒を持ち構え、椅子から立ち上がった。カウンターを迂回して、二十人の前に立ちふさがる。単なるサラリーマンかと思うかもしれない、だが今こそ勇気が必要だった。

俺は箒でペン回しを始めた。敵が近づいてくる。空をきつて一人の盗賊を打ち倒した。次も打ち倒す、箒が鞭なりのように響く。人生で生きている気がした。

―勇者の技レベル1―を使う。

大きく振り絞って本を叩き落とす。男の顎が砕けるんじゃないかと言っくらい吹き飛んだ。くるりと回転して後ろの男の頭に本を振り落とした。本が凶器になることを俺は身をもって知っている。なぜなら本によって死んだのだから。

今ので四人が倒れている。リーダーが慌てて全員同時に襲ってきた。

―指揮者になる―を利用して、箒を空中に浮かばせて片っ端から頭をたたきちかづいたら、止めの勇者の技本アタックを決める。くるくると回る箒と本がマッチしていた。そういえば岩をおも砕く腕だから気を付けないと、どうやら彼等の頭蓋骨は固いようである。全員が倒れていた。

―勇者の技レベル5―

―箒を使うレベル60―

―本レベル25―

箒だけが驚異的だよ。俺は倒れた彼らに慈悲深い微笑みを向けた。

「オメーらカツ丼食うか」

「うおお」

「てめーら声が小さい」

『食べたいです！！！！！』

まだガキの彼らを見守り正しい道に戻るのが俺の役目だろう、みんな飢えているようだし、なぜ客が微動だにしないのか、彼らはわかっていたのだ、図書館に現れる浮浪者はブアンビーか俺に倒されるのだと、まあ、こいつらに飯を食わせて交渉で理由くらい聞かないとな大人の役目ってやつだ。

4 万引きと図書館の防衛（後書き）

新しいメンバーが加わりました、万引きおばちゃんのルーサーです。彼女の家計は謎に包まれているのだとか、冗談はおいでおいで、拙い文章ですが、面白いものをおくれるよう悲鳴をあげて努力するつもりですので、見守っていてください。

5 働かざる者食うべからず（前書き）

この話でちょっとだけ謎がとけます。

5 働かざる者食うべからず

俺はリーダーと会話していた。みんな涙を流しながら獣耳を震わせてカツ丼を食べていた。リーダーの話によると。

「狼傭兵団って言われてたんです」

ガキたちのリーダー、名前はウルクーダがささやく。

「ウルクーダお前たちまだガキだろ」

「食うためです、ひどい仕事もしてきました。それも昨日までだったんです。王族にはめられました。百人いた俺たちは壊滅しました。王族の護衛で囹に使われたんです。反逆者に襲われて王族は撤退、俺たちを囹にして、俺たちは必死に撤退してご覧の通り二十名しか残りませんでした」

「そうか大変だったな」

「仕事もできませんから俺たちは盗賊になるしかなかったんです」

「それは違う」

「なぜですか」

「働かざる者食うべからず、金は用意できないだろう、ここで働き食事と寝る場所が提供できる。その間仕事を探せばいいだろう」

なにかカツコいいこといつてるな。

「何かつてにきめてんのよ」

「ブアンビーいいじゃないですか」

「いいけどここは鬼軍曹にまかせてちょ」

「わかりました」

「ではみなさん」

ブアンビーの香水が鼻についたいい臭いである。風呂の時は残念であった。

「今不埒なこと考えた人鞭打ちです」

というのは冗談だ。

「さて皆さん今からあなたたちに仕事を与えます。新しい本を調達してください。作家から調達するもよし、自分で作るもよし、異界から交渉してもらうのもよし」

気になっていたことどうやって異界から仕入れをするのか。

「そうだ特別にあなたに説明しましょうひざまずけというのは冗談です、自分で見つけると言いましたがこの子達が来たので特別です。この世界の仕組み」

「ありがとうございます」

「しかし現実には厳しいです。この世界もひとつの本だということ、神様と交渉して本を手に入れる為にはとても面白い本を作ることなんです。私は小説家で、天界に一冊送って二冊受け取ってます。送り方は魔法を使いますみんなが使える魔法です」

「なるほど」

本当なら自分で見つけなくてはならない世界の真理、自由に読んでいる本で見つけると暗示していたのだろう。だが彼らの登場でそうもいかなかったわけだ。

「つまりあなたは面白い小説を書くしかないので。元々あなたは小説家です。まずは彼らに素人ながら天界より低い異界の本を手

入れさせてみましょう」

みんなの目が輝いた。獣のようだ。

「皆さんには寝る場所と食事を提供します。次の仕事が決まるまで小説を調達してください、小説家一覧は事務所の壁に張り付けておきます、異界に送るときは一声かけてください、小説家さんは頼んできたことをしないと小説をくれません、あなたたち傭兵の力が意味あるものになるでしょう」

ウルクーダが手をあげる。

「どんな仕事なんですか」

「それは人によりますが大抵は小説家の悩みです。気になる子に代わりに告白してだとか、買い物にいかされたり、畑を耕したり、代わりに商売したり、彼らのめんどくさいことをするだけです」

ウルクーダがほっとしたようである。

「寝る場所は練習場を使ってください、図書館の裏にあります。二百部屋あるので、自由に使ってください、広間の芝生の練習場も使ってください」

話によると、ドーム型の図書館の裏には、芝生の広間があり、周りに二百部屋があるのだとか、そこで昔、反政府が占拠していたこともあったのだとか、ブアンビーの情報であった。

俺はふうと一息ついた。みんなキラキラするめでこちらを見ていた。

「兄貴と呼ばせてください」

「兄貴」

「兄貴」

「姉御」

「兄貴」

「姉御」

「二名たて俺のこと姉御と呼んだやつ、今すぐに整列！！」

みんな無視していた。と思ったら後ろでルーサーが笑っていた。
あんのクソババア！！

「ひゃひゃ私よりも目だとうたってそうはいかないよ」

「おめー一度死ね」

「死ねる体じゃない、私の体は無限大の夢に溢れている」

「もう老い先短いだろ」

「それはわからないわよ」

といいながら本棚から本棚へと壁づたいにジャンプしていく、棚
は天井まで続いている。どんどん上っていく。

「お前は忍者か」

「ひゃひゃ」

そして相変わらず夕方になろうとしても俺は本を読んでいた。力
ウンターである。小説を書いてみたいのはあるがこの世界のこと
をもっと知ってからでいい気がする。まあ小説家の宿命だけだね。

いつか神様を唸らせる小説を書いてやる。まずは日常の仕事をこ
なす、ー視線強化ーで万びきはすぐにわかるし、ー観察力ーで人の
位置も把握してある。今読んでいる本は『ピエロ』である。なんか

引かれる内容なのである。

夕方が終わり閉館になったとき。本を読み終わった。

「軽業師」を習得したみたいだ。

何か体が軽い、逆立ちもできた。これでルーサーに負けないぞ。
そのあと俺は料理をした。トマトソースの卵焼きをつくってみんなに絶賛された。

「料理レベル100」になっていた。

さて二冊選んで読もうと思ったが気になったので裏手に向かった。
寝る場所は事務所の二階である。あとで寝よう。

裏手には剣術の稽古をするもの、本を書いているものに別れていた。
本を書いているのは二名だけである。俺はのほほんと眺めていた。

ウルクーダがやって来た。

「兄貴の料理スゲーうまいです」

「俺の世界でもうまかったよ」

「あれも絶賛です。豆腐でしたっけ、大豆から作るなんて想像できません」

「朝から仕込んだからね」

「兄貴奴らに小説の書き方ってやつを教えてください」

「お前は？」

「俺は書くより悩みを解決して小説をもらった方が良さそうです。
小説をかけるだけの知識を持っているのは、ルンダとカンダの双子

です。その他はバカばかりです」

俺はその双子のところに向かった。一人は青い髪をしていて狼耳が可愛い女性みたいだ。もう一人は、赤い髪をしている二人ともほっすらとしている。

「ルンダはお前か」

「はい」

その声は女性であつた。

「お前は女性？」

「そうですけど」

「あれれ」

ということは俺は女性に本で攻撃したのか！

「ごめん」

「気にしないでください」

「そっちは」

「カンダです男です」

「お前はよろしい、それで小説を書くんだって」

「「はい」」

「まずは物語の流れ、つまりプロットを作ることを進めるよ、書きたくないかったら別にいいが初心は大事だ。しかしこの世界ではそうもいかないだろう、君たち流に考えてくれ」

「それなら俺は絵を見て書くつもりです」

「それはいい案だ」

「私は絵を描いて描写して、人も観察します」

「それもいいがあまり変な目で見られるほど凝視はしない方がいいだろう」

「わかってますじいじい」

早速俺を観察していた。距離をおいてもこちらをみていた。俺は剣術に励んでいるウルクーダに話しかけた。

「どうだ」

「なかなかみんな強くなってます」

彼のなりたちは銀色の髪の毛に獣耳、軽めの鎧をつけている。

「一戦願おう、お前は真剣を使え俺は本と箒だまってる」

俺は事務所に戻って、料理の本と箒をつかんで戻ってきた。

「手加減してくださいよ」

「いいだろう」

俺とウルクーダが向かい合いぶつかった。箒が跳ねるぶんと鳴る。剣に防がれる。

「箒を使う601を活用する。箒を地面に当てて自らの体を宙にはねあげる。」

「勇者の技レベル51を活用する。本を勇者の技のように叩き落とす。」

「本レベル251を活用する。本が風のごとくおどりである。剣が弾かれ、本が男の顔面に直撃しようとしたところで、空気を止めるように。」

「軽業師1を使用して回転して空振りにさせる。」

ウルクーダは驚いていた。

「兄貴あんたもしかしたら、国の魔法騎士よりも強いかもしれない」

「魔法騎士？」

「魔法が使える騎士団です」

「それがどうした？」

「あいつら横暴を働いてるんです。いつか兄貴が魔法騎士を倒すところみたいなの」

「いつかな」

俺とウルクーダは笑いあっていた。

5 働かざる者食うべからず（後書き）

異世界との交渉はどれくらい面白い本かで交換し会うのです、天界はとてつもなく面白くなければなりません、そう考えるとブアンビ―は何者なのでしょう？ 拙い文章ですがよろしく願います。評価、感想をお待ちしております。

6 世界について学ぼう(前書き)

ここで世界観を少しだけ紹介します。

6 世界について学ぼう

俺はウルクードと分かれて、図書館をぼうつと眺めていた。そもそも考えたら、自分がある世界のことを何もしらなかった。どんな政治があつて、どんな軍があるのか、どんな武器があるのか、俺は算と本があればいいが、魔法騎士団がどんな魔法を使うのか、何も知らない。

そこで、俺は二冊の本をそんな感じの本にしようと思つて、吟味に吟味を重ねた。二十棚の一番上にまで上る、梯子を使うのは意外と怖かった。お客さんが平気に使っているのを見ているから何より驚きを隠せない。

誰もいない図書館はひっそりとしていた。もの悲しい感じである。お腹が膨れている今はとても幸せだ。小説家だったころ、売れない本に嘆いて、ゴミをあさったこともあった。そして、知り合いのコンビニの店長から売れ残りをもらったりもしたことがある。いろいろと知り合いにお世話になったが、やはり一人ぼっちだった。孤独だった。でも今は違う、慕ってくれる友がいる。

おばちゃんは除きます。

俺は、一冊の本を抜き取る。

『現在いる世界の仕組み』

もう一冊は。

『国の歴史』

俺は、その二冊を抜き取って、梯子から降りると、カウンターでランプの光の中で、本を読みふけた。流れはこんな感じである。

『この世界は、魔法と武術が進化した世界である。この世界をワンモアワールドと呼ぶとしたら、本の向こうの世界をツーモアワールドと呼ぶ、これは略称に過ぎない。これからが大事な話である。魔法は体が持っている生態エネルギーを変換するのではなく、空気中に存在する元素を分解して行う。よって誰でも出来るが、術式と真名が分らないと使用できない、貴族たちがそれを利用して、協力的な魔法を独占している。よって、貴族、王族同士での戦争が絶えず。この世界は、七つの大陸に分かれて戦争をしている』

本当に長ったらしくて、頭が痛くなる。

『貴族は奴隷を持つことを当たり前だと思っている、時たま、転生者と呼ばれる不思議な、魔法の力にも、武術の力にも違反した、者が現れ、世界を平定するといわれているが、ことの真相は分からない』

俺のことなのか？ ちょっと疑問だけどね。

俺なら、平定はできない、なぜなら、小心者で五センチしかなかったし、きっと本体は五センチなのだろう。とっても小さくて驚きだよ、そんなチビに何をすれと？ 魔法の力で、いや変な力で、大きくなっているのに。

それはさておき。

『現在いる世界の話』を読み終わると、何かを覚えたようだ。

――博士――

そんな変な名前はいらんから、能力を説明しろ。

つまり知識がついたってことだろう。

そして、次の本をあさるようにして読みふける。時間の流れがあまりにもスローペースであった。風が吹いたが気にせず。読む。

『国の歴史を読むにあたって注意事項、これは、現在セルフネ暦305年に書かれたものである。現在の暦を確かめてから読むように、図書館には随時更新するように言われております。その手元にあるということは、更新されたのでしょうか』

お、ちょっと謎だけど、後ろを振り返って、カレンダーを見つめる。

―セルフネ暦305年―

と書かれてある。ひとまず安心して、ページを捲っていく。

『ララット大陸のララット国は、今も平和な政治を維持している、民から慕われる王族たち、民から愛される貴族たちの下でみんな暮らしている。武力はさほどなく、魔法力が高い、魔法学を民にも公開している。歴史は長く、テーラーズ大帝のときにテルマーシ大陸から大陸魔法で大陸を切断し、新しい土地を作ったのが国の起りである。その時から、テルマーシ大陸、テルマーシ帝国とは仲が悪い、テルマーシ帝国の北に位置し、サラルスレット大陸のサラルスレット国はテルマーシ帝国から独立を宣言し、ララット国と交易を持っているが、サラルスレット大陸では奴隷制度が一般的である』

はあ、なんかよく分からない字面ばかりだな。

俺はめんどくさそうに次のページを捲ったのだが、驚愕する。

『そのほかの国についてはいまだに分かっていない』

なんじゃこりゃ、これ未完じゃん、誰が書いたんだよ、書いたの、名前ないし。

俺はため息をついた。

――未熟な知識レベル――

そんなもん必要ねーよ。

俺は空気をすって、ぼんやりとランプを眺めながら、本を元あった場所に戻すと。とぼとぼと事務所の二階に戻って、眠ろうとした。そつえば、ブアンビーはどこで寝ているんだろう？ ふふふ、彼女の艶姿を見てやろう。

忍び足で、事務所の奥側に向かった。立ち入り禁止と書かれてある場所がある。そこにゆつくりと入り、扉をじょじょに開く。するとそこには、素っ裸で、いや違った、全身に包帯を巻いて、小説を書いているブアンビーがいた。

俺は驚愕して、言葉にならなかった。

「どこに、全身包帯で、小説を書くやつがいるんだよ、ここにいやがった」

彼女がこちらを見て、にやりと笑った。

「私の小説は危険だ離れろ」

「そんな危険なわけねーだろ、ってうおおお」

小説が歩いていた。なんじゃこりゃあああああああああ。

小説から手が出ている。そして、頭が出ている。その頭はイノシシであった。

ぎいいいやああああああ。

その叫び声は心の中にしまっておいた。

本の外に出ようとともかく彼らを眺めながら、ドアを半分開けて見つめる。

「なぜか、私の小説は、一時間置かないと、何かが出ようとするんだよ、だから、ここには結界がはってある。化物が出れないようにな」

「俺のときもそうだったのか？」

「安心しろお前は違うから」

これ、日本にいたなら妖怪になっていたかも歩く小説だとか。

「何のようだ、まさか、艶姿を見ようとしたのか、それならもう見ているぞ、この包帯の下は生だ」

「へえ」

そんな意味のない会話に何がある。確かに胸がたゆんとしているけどさ。

「この包帯をとったら、匂いを嗅ぐか？」

「俺は変態じゃねえええええええ」

ボタンと閉めた。まあ、変態でもよかったかも。

ちよつと迷いつつも、俺は、部屋に戻って、ゆっくりと眠ったのであった。

―未熟な知識レベル―

あの女性の意味不明なことを見て、そんなことを学んだのなら、俺の脳みそはちっせーぞ。

6 世界について学ぼう（後書き）

拙い文章ですがよろしく願います。

心を曲げずに頑張って参ります。

でもちよつと折れそうかも。

お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。

7 魔王最強（前書き）

魔王が登場します、とんでもない力をもって。

7 魔王最強

俺は寝ぼけ眼をさすって、立ち上がった。四時に起きたのである。そして、早速、一階に行くと、箒を片手に掃除を始めた。まだぐらーんぐらーんとゆれている感じで、四時の鐘は頭に響いた。

酔っ払っているわけではなくて、とてつもなく眠たかった。まるで長い夢を見ていたようだ。長い階段を上って、落ちたら目ざめたという変な物語だった。

俺は、驚異的なスピードで掃除を繰り返していた。そう箒回しが簡単に出来るのである。ものすげー速さで埃を隙間から取ると、あつという間に掃除してしまう。集めた箇所には無数の埃が、チリトリで外に放り出す。ぼふんと音がなった。頭に直撃したようだ。そこには、牛魔人がいた。

「やあ、こんにちは」

「牛がしゃべった」

「これかぶりもの」

かぶりものをしまうと、そこには金髪の乙女がいた。それも成熟した大人である。女性のポイントは小さかったが、クリアだろう。

「誰ですか？」

「私、魔王を勤めております、魔王といいます」

「はえ？」

「ですから、人々を苦しめる魔王を勤めております、魔王といいます」

「そうですか、マオウさん、こんにちは」

「発音が違います。魔王です」

「そうですか、舞おうさんこんにちは」

「私は踊りませんし、舞いません、いいですか、魔王です」

「こんな可愛い魔王いるわけねーだろ」

「あ、待ってください、いま力見せますから」

すると、彼女はノートをめくって字を書いた。

――雷が落ちた――

ずどどどどどどん。

何事！！！！！！！

空から雷がマシンガンのように落ちてきた。なぜか、結界があるのか、図書館からはじかれる。図書館は無事だが、近くの森が丸こげであった。

「ね、こんな感じです」

「しゃれにならんわ」

俺の雄たけびが上がった。

ということ、この危険人物をお招きした。

――幕を使うレベル70――になっていた。

どんどん上がっていくな。

この世界には不思議がありすぎる、ノートに書いたくらいで現実
に干渉するなんて何者だよ。俺は、お茶を用意した。ハーブティー
である。

今は六時である。二時間で掃除を終わらせたのは進歩である。
そして、俺は、対面に座った。隣にはブアンビーがいる。

彼女が険しい顔をしている。

「私の魔王軍団も壊滅的だし、そろそろ反逆してもいいですか、お師匠」

いや、まで、ちょ、まで、こいつなんていった？

「いや、待ちなさい、時を見計らって」

「ちょまで、あんた、師匠ってことは、元、魔王か」

「私は人間よ、この滅茶苦茶超人と一緒にしないで」

ブアンビーさんそれ意味わかってる？

「すみません、お師匠というのは、一緒に育ってきた中で、姉的だったもので」

「魔王が謝らないで」

俺の当然の突っ込み、なにかのゲームかこれ？

「そうなのだよ、私は、前魔王に育てられた。こいつが魔王を受け継ぐまで一緒に育ったが、一応私は人間だからな」

「はいわかりました」

「それです。そろそろ人を滅ぼしちゃってもいいですか」

「ちょまで、今日の前に師匠がいるぞ？」

俺の突っ込みに彼女がポンと手を叩く。

「なら男性限定で」

俺の死刑宣告が出た。

「まあ、まて、こいつは下僕だが、大事だ、人間を滅ぼすのは考えてくれ」

「分かりました。でもどうやって、テルマーシ帝国の魔法騎士を滅ぼせと、私の力ではぱつと解決しようよ、魔人たちだって、生きる権利があります。ここに魔人権があることを追求します」

「そうだな、もうそんな時期か、分かった。お前は、そのありえない力で、最終防衛線を守っている、後のことは任せるんだ。まったく、人間はいつも差別で、力を振るってきた。もう限界だな」

何の話をしているんだろうか？

「おい、ホンポよ、お前一人で、帝国滅ぼしてこい」

「んなむちゃな」

「滅ぼさなくてもいいから、何かに感動させる」

「何かって」

「とにかく、今月中に最高の小説を完成させるんだ」

「それと何が関係あるんですか」

「知ってるか？ テルマーシ帝国の魔法騎士団長のバラーリール王は、感動を数回しかしていない。だから、いつも欲望のままに物事を進めてしまう、この図書館はな、魔人と人間の境目に立てられている、だから、最終防衛もかわってくるぞ、中立を維持してるから大丈夫だな」

「えっと、魔人ってどんな人たちのこと？」

「エルフだとか、狼族だとか、だな、ウルクーダも含まれるぞ」

「本当か、そりゃ、見てみぬふりできない」

「バラーリール王を感動させること、私も一応予備作品はつくるが、お前の肝試しにいいだろう、お前が失敗しても私がいるから大丈夫だと思うなよ、私でも彼を感動させたのは、十回だけだ」

すると魔王が微笑んだ。

「全部そのおかげで、人間は生き延びられております」

「そういうことだ。人間は魔王族の強さをわかっていないんだよ、あの力見ただろ？　ありえないから」

今日の前に魔法騎士が雷によって粉碎されるのが見えてしまった。

「といっても感動させるって、どんな方法でだ？」

「うむ、それは、考えていなかったが、魔人と人間の平和的なやつだ」

「わかったよ、一週間休みくれる？」

「いいぞ」

「それと、図書館自由に使っていていいか？」

「いいぞ、使ってくれ」

「よし任せろ」

その日から、王様を感動させる小説書きがスタートした。

7 魔王最強（後書き）

勇者はまだ出てきてませんが、色々と妄想を繰り広げています。
信号の影で死んでいるような僕は叫びます。読んでくれ！とでは拙い文章ですがよろしくお願いします。

8 小説を書きましよう(前書き)

ここから小説作りが始まります。

8 小説を書きましよう

俺は体をひねった。何も思い浮かばなかった。そりゃそうか、最近色々なことが起りすぎて、脳みそが処理しきれないのだ。俺は、眼にハンカチをあてて、目をゆっくりと瞑った。時間の流れがスロ―に感じる、

――博士――を習得してから、考え事をする周囲の時間と脳みその時間が隔離されるのだ。変な感じだが、外で二時間たつていても頭の中では四時間も過ぎている、その分考えることができる。つまり、一週間与えられるということは、二週間与えられるということである。

ハンカチがふんわりと気持ちいい、しばらくそうしていると、色々なことを考えた。

感動とは大きな課題である。何をどうして、何がどうなったから感動するのか、それは人には分からないし、考えた人もいるだろう、だが、感動とは、つまり生きている証明みたいなもので、感じ入り、そして、感動したと感じれる肉体を持つていないといけない。

そして、自分は持っている、今まで感動したことを振り返ってみる。映画を見たり、本を読んだり、漫画を読んで感動したことがある。何を感動かについては分からないが、そこには確かに感動があった。

感動とは二文字で感動である。感じる動じる、それが感動である。俺は色々と考えた。トリックを考えよう、見た目には、そう感動とは思えないのに、べつな視点から見たら感動するような物語を。

俺はさらに夢想にふけっていく。

主人公は魔王を退治しにきた勇者一向である。一向は、色んな苦難、ここでは省略するが、それを通り過ぎて、テルマーシ帝国の威信を受けて、進軍をする。だが、そこに立ちふさがるのは魔王である。魔王と闘う仲で、不思議な感じを覚える。魔王が女性だからではない、それは一人の人として感じるもの、彼らも自分たちと同じように、自分たちの種族を守りたいから闘っているのではないか？

そして、魔王と勇者が会話していく中で、打ち解けていく、感じ、だが、そこには、一向たちの不満もあった。戦士は母親を魔王たちに殺されている。魔術師は父親と弟を魔人に殺されている、勇者も家族を全員魔人に殺されている。

恨みは恨みをつくり、

二人はまたぶつかろうとした。

だが、もつと冷静になった。勇者が殺してきた、彼らにも家族がいることに気付いたのである。魔人たちの家族、彼らもこちらを恨んでいる。

そして、戦いをやめる二人。

周りがはやしたてるが、二人は共感していた。

そして、叫ぶ。その真ん中に国をつくることを宣言する。

魔人と人間の国である。

それは、何か？

次巻に続くのである。

ここまでの構想だけでも相当頭を使った。

そして、俺は、立ち上がった。ちょうど開館を告げていた。

また頭の中に入っていく。

だが、その真ん中に作った国は一つの図書館に過ぎなかった。そこで、国を作るなんて無茶だった。そこに、転生した謎の男が現れ

る、彼は、本を読んで、無敵の男になった。

その男は、旅をすることもなく、一人で本を読みふけり、図書館という国に入るものをただひたすら倒した。そして、受け入れた。敵は倒し、味方は受け入れる。

その男は、ただ成長していった。

勇者と魔王はその男を不思議に思った。一体何をしたいのか？

図書館を守る守護神のような男。

その男は、ただ一言呟くのである。

「本が怖いと」

たったそれだけである。

そして、その男は、外に出ることもなく死んでしまう。戦争を嘆くでもなく、悲しむでもなく、だが、そこに裏があった。本当は死んでいなかった。そこで、真実は隠される。

そして、最終章にて、男は、多数の仲間を引き連れて、魔人の陣地にも人間の陣地にもやってきて、人々に沢山の知恵を授ける、それは殺されたら恨みだけではいけないという綺麗ごとではなかった。それは、一人の人間として強大に生きると告げたのである。

そんな男の周りにはいつしか人があつまった。人間も魔人も関係なく。

そして、男は久し振りに図書館に戻った。

北では人間が侵攻を始めようとしている。中間では、勇者と魔王が止める。南では魔人たちが防衛をする。

そして男は動いた。

王族を説得しに、王族の説得のために、男は、自らの右腕を切り捨てた。その右腕を見せて、王族は黙った。男は、右腕を返してもらうと、接続した。

そして、戦争をやめないと、自害すると呟く。男の英雄的な話に民たちは歓喜している。王族はあきらめようとしなかった。そこで男は本当に自害した。

そこでようやく気付いた民たち、魔人たち、戦争をやめるように武器を捨てた。

そして、みんなが、王族を非難するでもなく、もっと前を見据えるという。

そして、王族は立ち上がった。

魔人たちと手を組み、新しい国を作るのだと。

そして、物語は本当のクライマックスに進む。

男は死んでいなかった。沢山の弟子たちに意思を引き継がせ、その命は遙か、天をも突き破った。

だが、これだけでは物語は終わらない、そこには素材が必要である。つまりところ知識である。だから、一週間の期間があり、博士の力で二週間がある。

意識を現実に戻すと、お客さんが、沢山本を読んでいた。

俺は立ち上がって、本棚に向かう。一冊抜き取り、カウンターに戻る。

『王様の哲学』

これを二時間かけて読み終わると。

— 哲学 —

を学んだらしい。

そして、これでも足りないから、次に、『全種族一覧』

これも未完であつたが、レベルが上がった。

―未熟な知識レベル20―になったので、ここらへんでしまつておく。

そして、次に読みふけるのは、と考えたが、もっと冷静になれ、戦争シーンでは地形やら何やらが使われる。ということとは。

『テルマーシ大陸の地理』

を眺めながら。もう夕方になろうとしていた。ご飯も食っていない、食べる気がなかった。俺は、ただひたすら、小説を書くことを脳みその中だけでプロットを作っていた。

―テルマーシの地理レベル1―

を身につけたみたいである。これだけじゃ、物足りないから。

『テルマーシ大陸の地理2巻』

を読みふけると。

―テルマーシの地理レベル10―になった。

ここらへんでいいだろう。

立ち上がって、台所に向かって、ハヤシライスを作つて、まずは、ブアンビーとルーサーに配り、次に、裏手にいる二十名の傭兵団に配った。

―料理レベル15―

になっていた。

「兄貴、何深刻な顔をしてるんですか？」

「いや、王様を説得するために、小説を書くんだ」

「なるほど、がんばってください」

ウルクーダが微笑む。裏手には五冊の本が並べられていた。どう

やら仕事を果たしたようである。

「仕事は順調か？」

「はい、小説家の頼みごとをやって、なんとか五冊手にいれました」
「がんばれよ」

「ほどほどにです」

彼が微笑む。それは暖かい微笑みであった。

「よし、俺もがんばろう」

「ほどほどにですよ」

俺は笑って、ハヤシライスを食べ終わる。食器洗いは各自自分でするようにしてある。

俺は、また本をあさるようにして、読もうとしたが、ふと気になることがあった。

扉を開けると、ちょうどノックをしようとしていた。魔王がいた。

「お前小説書けるだろ」

俺の呟きに彼女が頷く。

「どこでわかったの？」

「あの雷を打ったときに書いたやつでびびったときあのペンさばきはずっと書いてた証拠だ。タコもあった」

「そうだね、書いてる」

俺は顎をしゃくった。こんなにタイミングよく現れたのだから、聞きたいことがある。

「助言を頼む、魔王」

「そうだね、たとえるなら、あまり、考えすぎないこと、人間の王様って単純だから」

「単純？」

「だから、強いとか弱いとか」

「なるほどな」

「例えば人間の王様が、弱い者を見て、可愛そうだと思うやつと思わないやつにわかれるなら、この国の王様は、前者だよ」

なるほどな、

つまり弱いところを強く書かないほうがいいのだろう。

「だから、あなたの小説は、強きものばかりをかいた弱さをリアリティーに書くことが大切よ」

「分かった。試してみる」

強き中で弱さを探す。魔王は、二階に上って行って、ブアンビーのところに行ってしまった。俺はカウンターから立ち上がり、本棚に向かった。弱きを救え。そして、強きを語れ。

俺は一冊の本に眼が留まった。

『王様の逆転劇』

俺はそれをぱらぱらとめくっていった。そして、その物語に感動した。

――発想の転換――

を覚えたらしい。王様の逆転劇は、つまり、とてつもない物語なのだ。なんというか、一人の主人公が奈落まで落ちて、逆転するのだが、発想の転換をすることで、主人公が強く見えるのに弱く見え

るのだ。

俺はそれを脳内にメモして、蓄積する。――博士――の能力は、どうやら、脳みそを有効的に使えるみたいだ。まるで、パソコンのように脳が活用できる。

この力はとても使える。

俺は、決めた。王様を感動させてやると。

8 小説を書きましよう(後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございます。

9 王様を感動させる

朝になった。さっそく四時に目が覚めた。ごうんごうんという音が聞こえる。

俺は、とぼとぼとカウンターまで降りて、ゆっくりと瞑想した。頭の中に物語を詰め込む。基本が大事である。頭がパソコンなら今編集しているのである。

頭の中で分かること、誤字脱字を見つけて、訂正すること、それを繰り返して、俺は一冊の本が見えてきた。だがまだ遠い。

俺は、目の前を見据えた。そこには、寝ぼけて、本棚に挟まれて寝ているおばちゃんがいた。

ルーサーの寝る場所はなぜか、図書館のどこかということを決まっていた。

俺は失笑した。

立ち上がって、ルーサーの顔にロウソクの油で塗りたくって、変な化粧にさせた。熱くないのか、目ざめない。俺は放っておいて、本棚を見つめた。分厚い本が目についた。それは、『霸王』で始まっていた。

俺は抜き取り、この何も予測の出来ない本を眺めながら、ゆっくりと視点を主人公に変えていった。

俺は、そこに突っ立っていた。不思議な感覚である。沢山の人が死に、沢山の人が生まれる。そして、自分は取り残されていく。永遠に生きるとは霸王になることなのだ。

俺は途方にくれながら。ずっとぼーっとしていた。ある女性がやってきて何事かを囁く。

そして、俺は自分が見ている側なのだと気付く。目をゆらりと上げると、どうやら小説の世界に同化していたようである。もっと冷

静になりながら、またページをめくろうとして異変に気付く。
顔中がどろどろしていた。

俺は悲鳴をあげた。というか、もう夕方の四時であった。
しかも客が笑いをこらえている。

「クソババア」

俺の叫び声は当たり前前にルーサーに向けられた。
ルーサーを追いかけて、逃げられる。そして、俺は、はあはあと
息をつきながら、座った。

「ひゃっひゃ、お前は本バカだ」

「あっそ」

「お前には本しかない、大事な本でも抱いて寝てろ」

「そうします」

「うぬぬ張り合いないな、このへなちよこ、あそこもへなちよこだ
ろ」

「自信をもつてあそこはへなちよじゃありません、しかもあそつ
て心ですか？ 狭いですよ俺の心は」

「うぬぬ」

とルーサーがあきらめたので。俺は、また読書に励む、ロウソク
によってどろどろの顔を水で洗っておいた。

俺は、『霸王』の続きを眺めた。

そこに立っていたのは沢山の悲鳴を担いだ男である。俺は途方に
くれながらそれを見ていた。そして、気付いたこれが霸王の生き様
なのかと。そして、意識がクリアされる。夕方の六時になっていた。
読み終わった、この強大な化物みたいな本を。

俺は、疲れたようにぐたっとなると。

―霸王レベル―になつていた。俺は微笑んだ。小説の主人公のようにはいかないけど、心構えは出来た。次に俺が目付けたのは、思つたが料理を作つた。

片っ端から作つていき、俺は、蕎麦を作つた。

―料理レベル20―になつていた。

俺は、本を読もうとしてはたとやめた。読みすぎるのはいけない、沢山の情報量でアイデアが爆発するのである。今の現状で書けるものを残り六日で書けばいい。俺は頷くと。カウンターではなく、ブアンビーの部屋に向かつた。

「やっときたか」

「一日ちよつとしかたつていません」

「まあ、気にしないの、本をあげるから書きなさい、誤字脱字は消去できるから、やり方はね、何行目の何文字と呟いて、自分の名前を言えば消えるわよ」

「それが真名ですか？」

「初級の呪文は大抵が自分の名前なのよ」

「ありがとうございます」

一冊の分厚い本を渡された。

「できればもう一冊」

「まずはそれが出来てから着なさい」

「わかりましたよ」

「それと、あなた、たまには、みんなに声をかけなさい」

「いや、一日ちよつとですよ？」

「冗談よ」

彼女が笑つた。

そして、俺は、部屋に戻って、机と向かい合いながら書き始めるのであった。

俺の悪いところをあげると、それは、書き始めると時間を忘れることであつた。ひたすら、書き続けて、気付けば、朝の六時であつた。まだだ。まだ。栄養失調のように、倒れそうになりながら、そういうえば、最近朝飯食ってないことに気付いた。いつも夜飯だけであつたから。

それでおなかが満腹していた。でも今体力を使つたから、倒れ気味だ、何か栄養を。

俺はふらふらと歩きながら、ブアンビーがカウンターでこっちを見ていた。

「大丈夫？」

「大丈夫じゃない、何か栄養をくれ、できればお前の胸で暖めてぶお」

顔を殴られた。

「これでも食つてなさい」

俺は、せんべいを渡された。せんべいをもしやりと食べると一気に体力があがつたような気がした。

「私の魔法がついてるわよ、あなたたちの世界でいうビタミン剤になるの」

「よっしゃあああ」

俺はまた事務所に戻って、机と向かい合つた。ペンがある。一度つければ消えない、そして呪文を唱えれば消える文字。俺はひたす

ら、向かい合った。まるで剣闘士のように、じっとしている。そして、ペンを握り、動き出す。

物語の流れは流動的に動いている。その動きをつかめなくては何か、小説だ。

俺はひたすら書き綴った。その物語を。

俺の物語を。

俺の魂の作品を。

ひたすらつづった。その文字で。終わらない、文字が終わらない。気付いたら揺られていた。

「ホンポってば、食事だよ」

ブアンビーの叫び声である。

俺はふらりと立ち上がると、幽鬼のように料理をつくった。出来あがったのは、焼ソバである。みんなに配っていく。ソースはこのソースを使ったがいける。ちょっと甘味があるが。でも大丈夫。食べ終わると、俺はまた小説を書き始めた。終わることがない、戦いである。

残り五日

9 王様を感動させる（後書き）

小説作りの話も次の話で一段落します。どうかよろしくお願いします。そろそろ次の話を考えねばと著者は慌てるのであった。考えるけど先が見えない！著者のことは忘れて暇潰しに読んでやってください。評価、感想されると著者は嬉しがるでしょう。

10 感動の作品

それからの時間は正確には捉えきれていなかった。ただ書き続けた。そして、また朝がやってきた。寝落ちしていた。うとりと目ざめると。俺は覚醒した。ペンが進む。朝飯に魔法のせんべいを食べる。ひたすら書いた。書き綴った。終わるのか？ 終わらないのか？俺はこう思っていた、これは挑戦だ。俺のすべてをかけて挑戦しているのだ。

王様を感動させること、それに世界の命運がかかっている。俺は空気を吸いながら。

――博士――を力いっぱいフル稼働した。今まで貯めておいた知識を振り絞る。自動機械のように腕が動く。もう止まらない。手がずつと動く。そして、気付いたとき、俺は、倒れていた。

立ち上がったが。夕方の八時であった。

ブアンビーが目の前にいた。

「料理なら、傭兵さんたちがつくってくれたわよ、しばらく料理は忘れて、小説に専念してちょうだい」

「そうか」

立ち上がって、また書き綴る。俺の物語を、みんな応援してくれている。俺は勝負している。この世界を俺の世界の知識と合わさって始めてできる作品、そして、知識が渦のように巻き上げられ、驚くほどあつという間に出来上がる作品、そんな作品を夢見ていた。夢を見れば終わることがある。夢を見たら終わらない事だってある。

そんな少年臭いことを考えていた時期もあった。夢を見れば終わる、夢を見たら終わらない、まったく矛盾しているじゃないか、いまさら気付いた。

俺は汗びつちより書きながら、ひたすら書き綴った。そして、終わったときに訪れる満足感を待っていた。

それから、日にちはあつという間にすぎさつていった。残り四日になり、残り三日になり、そして二日になり、一日になり。

そして、一冊を書き上げ、最後の一冊をもちろん、ブアンビーからもらつて、書き上げた。

俺は満足感に包まれながら。ぼーっとしていた。それを今、ブアンビーが添削していた。

俺はもう頭から何もかもすっぱりと抜け落ちてしまふほどの不思議な感覚を味わっていた。

そして、ブアンビーが頷く。

「これならいけるわ」

「そうですか」

「俺にも見せてください」

ウルクーダが手をあげて、本を見る。

しばらくしてから、みんなが夢中で見ていた。

こんな最強な小説は人生で一度きりしか作れないだろう、だが小説家というのは二度も、三度も、作っていくのである。俺は、ため息をつく、その場に倒れたみんなな毛布をかけてくれた。そして、俺が目が覚めたとき、図書館に誰かが来たようである。まだ三時である。朝の。俺は立ち上がって、扉を開くと、一人の騎士と数人護衛がいた。

その騎士は長い髭を顎からたらし、金色に輝く剣を捧げ持っていた。

この人が国王だと悟った俺は、頭を下げながら、退却した。ブアンビーがやってきた。

「やあ、国王」

「この人間の恥めが、わしをまた感動させてくれるのだろうか」

「そりゃごもつともで」

彼女が微笑む。

そして、俺に二冊の本を差し出す。それは俺が書いた物語である。俺はそれを受け取って、王様をカウンターまで案内する。俺が座っていた場所である。王様はそこに座って、俺の本をじつと眺めていた。

「して、題名は？」

書き忘れていた。

そして、俺は呟いた。

『本当の平和とは』

「です」

俺が呟くと、王様がうなだれていた。

そして、よく考えながら、ページをめくっていった。

王様はそりやもうがむしやらに読んでいた。

俺は思い出すあのシーンを書いたのだとか、このシーンを書いたのだとか。

沢山のところを直した。

主人公が殺した魔人は魔王の弟だったとか、細かい設定を加え、魔王が助けた少女は、勇者の妹だったとか、色んな覇王的な意味で、付け加えた。

それが、色んな物語に連鎖となつてつながっていき、そして、そのつながりが本当の平和とはを導きだす。

俺はひたすらそれを書きなぐったのである。

王様はただうとうと呟いて、涙をぼつりと流しながら読んでいた。

俺の渾身の一撃である。

王様はしばらく無言になると、ずっと見つめていた。呼吸をするのも忘れるくらい眺めていた。そして、王様が頭をひねって、考える。それが、一巻の終わり。

二巻にて、本当の主人公が登場する。題材は俺なのだが。ちょっとひねって、ありえない話に持って言ったのである。

俺はただひたすら王様を眺めていた。王様が笑い出した。

そして、心から涙を流していた。俺も流したかった。彼らの生き様、自害せねばならぬ主人公の気持ち、弟子に受け告げられた意思、弟子が成長していく物語も書きたかった。

だが、それは、勇者と魔王の間に出てきた。一人の男の話、一巻で勇者と魔王は目的を果たした。次に男が二人の目的をはたすためにがんばる。

そんな物語。

平和とは何か、そんなものは当たり前にはない、犠牲の上にある。俺はそう思っている。俺の世界では戦争は少なくなったがやはり起きてはいる。

そんな中の俺には、この世界の戦争は分からないが、平和を願っている。

王様がこちらを見ていた。

「見事なり、褒美を申せ」

俺は首を振った。

「平和です。この物語にあるように、これがきつと、魔人が思っていることでもあり、そして人間が思っていることでもあります」

「だが、現に魔人は教会の教えでは悪魔だぞ？」

「教会があるのですか、知りませんでした。魔人も生き物です。」

悪魔と決め付けて、殺すのはいけません」

「ふむお主が言つと説得力があるな、考えてみよう、わかった。では、わしは帰る、戦争はなしじゃ」

王様が笑った。

そして、護衛を引き連れて帰っていった。

俺はため息をついて、心を落とすと、微笑んだ。

ブアンビーも笑った。

俺たちは平和を勝ち取ったのである。

戦いではなくて、戦争ではなくて、武術でも魔法でもなくて、単純に感動させるだけのお話、それが、俺流の戦いであった。

俺はただぼーっとしていた。そして、俺は立ち上がり、みんなを呼んだ。

ルーサーもやってくる。ウルクーダもルンガもカンダも傭兵団も揃う。

「みんな、指示するから、料理を作ろう」

「任せろ」

「何すればいい？」

「私は？」

「ルーサーを忘れるなよ」

「私は？」

「私は？」

最後の二名は、ブアンビーと魔王であった。

俺たちはパーティーをやって、みんなで豪華な食べ物を食べて、よく眠った。目が覚めると、どんどんと扉が叩かれていた。

何事かと、俺は、立ち上がると、ドアを開いた。

そこには長打の列が出来ていた。

「どうしたんですか？」

「国王を感動させた本が見たいです」

噂が広まっているらしい。俺は啞然としながら、二冊しかないことをためらった。

だが、もうやるしかない。

後ろにはブアンビーがいた。

「特別に四時から開館します」

扉が開いた。カウンターに置かれてある二冊。

客がこちらにやってきて、俺から、二冊を受け取ると順番に読んでいった。数を数えても数百人がある。次々と人が現れて、数千に膨れ上がる。そして、俺は、考えた。

同じ物を作れないかと、だが魔法が使えない俺には無理であった。だから、せめて長打の列を直すために、整理券を配って、みんなが自由に本を見てもらって、順番が着たら呼ぶ仕組みにした。それでなんとか、百人は読んでいった。残りの数千人は、整理券を持ち帰って、次の日にやってきてもらうことにした。

だから、図書館は人だらけで、埃もすごかった。こりゃ、掃除が大変そうだ。

俺は微笑みながら、箒を片手に閉館を注げる音とともに掃除を始めたのであった。

今日も平和だな。

10 感動の作品（後書き）

最高の作品を作った主人公はこれからどうするのか？ お楽しみに
してくれば嬉しいです。では太陽に突っ込む著者を見送ろう、拙
い文章ですが努力して参ります。では！

1 平和とは（前書き）

新章開始です！！

1 平和とは

朝の四時、それは俺の起きる時間である。ごんごんと音が鳴り響く中で、俺はいつものように立ち上がった。ほぼ機械的に動く俺は、箒を片手に出勤した。

消防車に乗る隊員たちのように素早く機敏に、ほぼ、無意識に体が、動く。

掃除は恐ろしいスピードで終わった。三十分、それが現在の進行具合である。

そして、埃を外に放り捨てると、ほぼ無意識のようにゆらりゆらりとして、朝飯をつくる。目玉焼に小麦粉をこねったパンを焼き、テーブルに載せる。この世界では朝飯を食べる習慣がないらしい。みんな夕飯だけで充分だとか。

そういうのはいけない、健康体とは、そういうことではきずかない。よって、俺はここに朝飯を宣言する。みんなで、わいわいテーブルで食べる。みんな寝ぼけ眼である。これも作った。木材を切断して巨大なテーブルを事務室に設えた。

ウルクーダがバターをぬり、ルンダとカンダがジャムをぬっている。なぜか、ルーサーはトマトをぬっていた。ちよっと気持ち悪い。我らが頭領、ブアンビー様は何も付けない派であった。パンを作るのはちよっと工夫が必要だったが。小麦粉が手に入ったので、簡単に作れた。

―箒を使うレベル80―になっているし。

―料理レベル40―になっている。あとは腕の見せ所である。

俺はもしかやもしかとパンと目玉焼きを食い終わると、日課になっている、体操を始める。

みんなもついてきて、外で太陽が昇ってくるちようどその時に体

操を繰り出す。

ラジオはないが、みんなも納得して、健康とはということで付き合っている。

そういえば、あの二冊の本で沢山の人が並んでいるが、噂が噂を呼び、人が人を呼び、今、一万人待ちである。俺は模写して、なんとか、六冊の複製をつくって、読む人を減らそうとしたのだが、あまり役にたたなかった。

そこで、俺は、自動模写を学ぶために、その本がどこにあるかも分からないまま探し続けているというわけである。

一昨日が王様訪問で、昨日がなんだかんだで、忙しくて、本は読めなかった。今日こそは本を読んでやる。ブアンビーも準備してくれているみたいだし。

そして、俺たちは体操を終わらせると、みんな、それぞれの仕事に繰り出される。

俺は、カウンターに座ると、ブアンビーが何冊かの本を机に置いた。

「はい、これ、新しい仕事に必要なだと思うから」

「ありがとな、がんばります」

「死ぬほどがんばってね、死体はちゃんと掃除しておくから」

「それ怖い」

「安心して、あなたの死体は、腐らないように保管しておくから」
「お願いします」

すると、ブアンビーは受付に座って、お客を待つしぐさをしている。髪の毛をはらりと払うのが、これまたたまらないし、その時にゆれる美乳がたまらない。そう彼女は美乳だ。そんなことどうでも

いいよと思うが、彼女の胸を生で見たことない俺にはちょっとした妄想にしかすぎない。

俺は、本を捲った。一冊目はなんだろうか。

『ワープ小僧』

なんじゃこれは、俺ははらりと捲り続けた。物語が面白い、主人公たちがワープして、戦っている。なんか映画で似たようなやつがあったな。俺はふうと一息つくくと、読み終わった。

「ワープ魔法」を覚えた。そうである。何に活用できるのだろうか？

俺は早速立ち上がった。ちょうど開館を次げた。

俺は、お客さんがやってくるのを眺めながら、この前、ブアンビーのおじさんの銅像を壊した場所を意識して、ワープ魔法を唱えた。目を開けると、そこに広がっていたのは。壊れた石ころの銅像の前であつた。

「すげー」

「うおおお」

ウルクーダさんが目の前にいた。

「兄貴、ワープ魔法使えるんですか、冒険者くらいしか使えないと聞きましたか」

「なんか使える。それじゃな、仕事がんばれよ」

「はい」

俺は、カウンターを意識した、するとカウンターに座っていた。

こりやまたすごい魔法だ。

次の本を取り出すと、名前を確認した。

『魔女の歴史』

これは、女性が主人公で次々とやってくる魔女狩りたちを倒す歴史であった。ちよつとグロかった。俺は、本を読み終わると、立ち上がった。

― 箒に乗る ―

なんか意味あるのか？

俺は箒を片手に持つと。

― 箒を使うレベル80ですので、作用されますが、使用しますか？ ―
脳内に意味の分からない言葉が出てくる。

― イエス ―

すると、脳がスパークするようになった。

俺は外に出ると、箒に跨った。

次の瞬間ありえないことが起きたのである。ほんと箒が爆発して、空を飛んだのである。俺は悲鳴をあげたかった。しかし地面を見据える、どんどん上に上がっていく、脳内に操作の仕方が送られてくる。俺はそれを必至にやっていった。

スピードはとんでもなく速い、図書館をぐるりと回って、森やら湖やらを見ながら、ちよつとだけ遊覧して、俺は、図書館に戻った。相変わらずドームのような広さである。

俺は、地面に降りると、ウルクーダとまた目があった。

「兄貴は魔女なんですか」

「うむ、魔女ではない、男だからな」

ウルクーダの悩む視線を感じながら、俺は図書館に入った。
図書館のカウンターに座ると、次の本をめくる、どうやらこれで最後らしい。

『本が恋人です』

なんか、恐ろしい小説を見てしまった。主人公は本が恋人だと思って暮らす。そして、主人公の人生の終わりに本が語りかけてくれる。それもあんだなんて知らないという一言で終わった。
なんとも切ない。

――本レベル100――

うにゃ、なんじゃこりゃああああ。

俺はあきれてしまった。

だって。

――本レベル25――だったぞ？

いきなり100になったぞ、理解できない、ためしに本を掴んでみた。とてつもなく軽い、投げてみた。ひゅんと音速を超えて、窓ガラスを突き破って、遙か上空に飛んで行った。あの本はどこに行ったのかと思ったら、反対の窓を突き破って戻ってきた。

俺はここの真実を突き詰めた。

つまり？

「俺の本使いは、この惑星を一周させるくらいの力をもっているってわけだな」

俺はにやりと笑った。

そこで、今日のお仕事は終わった。後はいつもどおりに見張りを
するのだが。いきなりドアが開いて、そこから、五人の鎧の騎士が
入ってきた。みんな抜刀している。

そして、そいつらが、俺の前までやってくると。

「ここにある、本をすべて、頂戴したい、これは、魔法騎士の命令
だ」

俺はにやりと笑った。

「ここは中立ですよ？」

「反逆者になるのか？ これは、国家からの命令だ」

「国王ではないのですね？」

「魔法騎士だ。戦争を始める準備をしていたのに、ここにある本の
せいで、戦争ができなくなかった。この図書館のせいだ」

こいつらは理不尽な理由を突きつけている。

そして、俺は苦笑した。

「ここは中立だ、お前らを叩きのめす」

「ほう、魔法騎士を相手にか？ このファイブファイアーのジンを
倒せるのか？」

「ジンさん、俺をなめないでくれ、ちょっと外に出るぞ」

ブアンビーがやってきた。

「あんたならできる」

俺がやるより、ブアンビーさんがやったほうが手っ取り早いんだ

けどね。

俺は、微笑みながら、本を一冊つかみ、箸を掴んだ。そして、俺は外に出た。この理不尽なやつを蹴っ飛ばすために。ちようどウルクーダたちがやってきた。俺を見つめて笑っていた。

1 平和とは（後書き）

理想的な本は何かあるだろうか？色々と悩みます、覚える能力と本の名前が一致してないといけないから迂闊なことはかけない、『神様になる』本は書こうか迷ったけど考えておりますこうちよつと捻った感じで。だってスキル神様なんて洒落にならんわ。ここまで読んでいただきありがとうございます。お気に入り登録してくれた方には涙を流してお礼をして参ります。

2 魔法騎士（前書き）

第と本で戦う主人公の物語！

2 魔法騎士

はい、みなさん、注目、俺は、本を片手に箒を片手に魔法騎士と向かい合っている。

彼は髭面で、金髪という貴族らしさが主立っていた。護衛は女性ばかりで、ハーレムでも作るのかよと突っ込みたくなる。

「お前、俺をバカにしているのか」

もちろん、魔法騎士の怒りなど無視しよう。

「聞いている、お前は本と箒で闘う気なのか？ 正気を疑うぞ」

「俺の相棒は本と箒さ」

俺の決め台詞に、女性人が、きゃーっとか叫んでいる。

「火傷するぜ」

俺がにやりと笑ったら。みんなが、うえーっと吐いたふりをした。その女性人は魔法騎士であった。

俺はにやりと笑った。彼と向かい合う。

「いざ、勝負」

「いざ、尋常に勝負、俺の真名に答えよ、ジン、ジン・リ・ボム」

すると、剣が爆発するかのように光った。爆発しまくっている。俺は、そこに向かって、箒を振り落とす。

「くたばれ」

「くたばるかよ」

彼がにやりと笑って、炎上中の剣を箒にたたきつけた。木材で出
来ている本は燃え上がるはずなのだが、なぜか燃えなかった。

「なぜだ？」

「どうやら、俺の魔力が注がれているみたいだ、そのためのレベル
制だったのか」

つまりレベルが付けられるということは魔力を注いでいるという
ことに解釈できるわけなのだ。そして、俺は、箒を構えたまま、本
を振り落とした。

魔法騎士が悲鳴をあげる。

「そんな、本くらいで」

顔面から受けたった魔法騎士、もちろん、その後の惨状はご覧の
とおり、魔法騎士が地面にめり込み、動けなくなる。その頭を叩く、
何度も、悲鳴が上がるまで。

「お前さ、バカだろ」

「バカはお前だろ」

「バカだってか？ お前は俺の本の力を侮っていたんだよ」
「侮っていない」

「ならなんで、負けた？」

「それは、単なる油断だ」

「それを侮っているというんだよ、こんなに綺麗にめり込んでしまっ
て、そこのお嬢さんたち、こいつを抜いて立ち去ってくれ、次やっ

てきたら、殺すから」

「ひいひい」

魔法騎士はバカだった。

俺は笑いながら、魔法騎士の頭を叩き続けた。頭が真っ赤になっているのにもかかわらず、俺は、男の頭を何度も何度も叩いた。男は泣き叫んでいた。男が地面から抜き出ると、全身がどろどろであった。

「覚えてろよ、この借りは」

「そう言うと思ったぜ、ちょっと待ってろ」

俺は、いらぬ本を掴んだ。そして、思いっきり、投げ捨てた。地面ぎりぎりまで、それが、空をきって、突き進み、木々をなぎ倒す。それが、山に巨大なクレーターを作った。

魔法騎士はもはや立ち直れないくらいの悲鳴をあげた。

「こいつ化物だ。魔王だ。魔王だ、ひいひい」

「俺は魔王じゃねーよ、それで、なんつった？」

「もう忘れてください、ジンという名前も忘れて」

「分かったよ、じゃあな、ジン」

「ひいひい」

俺は笑いをこらえていた。

それを見ていたウルクーダたちが歓声をあげた。みんなで揃って笑うと、仕事を始めた。

「あなた、本を自由に読んで良いわよ、もちろん、二冊までね」

ブアンビーがそういった。

「まだ昼だけど？」

「だって、あなたがやる仕事ってあまりないから」

「分かったぜ」

俺は、とぼとぼと図書館をめぐったのであった。

まず基本的に面白い本より、理想的な能力を手に入れる必要がある。あの美乳を目撃したいのは我慢して、今俺に必要な力を手に入れる必要がある。いいか、まずは状況の整理だ。

日本語が、この世界の言葉として活用される、ここも大丈夫だ。文字も同じ原理みたいだからな、じゃあ、何が必要かっていうと、どんなことが必要かはよく分らない、そもそも剣で闘うのではなく、本で闘うことから間違った方向を突き進んでいる気がするが。それも気にしない。

俺は途方にくれるタイプではなく、ひたすら前に突き進むタイプである。なぜかって、バカだから、あの魔法騎士みたいなバカじゃないけどな。

俺はひたすらに突き進むことしか出来ない。

ならどんな能力がいいか？ 決まってるだろ？

よって効率性を上げるために、俺はもう一体、いやもつと体が必要だ。一人は、掃除をして、本体は本を読んで、一人は料理をつくって、一人は、情報を集める。そこで、俺はにやりと笑った。本棚から一冊の本を抜き取る。

『分身の仕方』

俺はこれを捲っていく、スピードはなだらかで、唐突にめくる感覚。物語が終わるころに、ようやく眠気が襲ってきた。もう夜中で

ある。だが、まだ料理の時間じゃない。

俺は、それを読み終わると。

――分身レベル1――

なんか忍術を覚えたぞ。俺は、脳内でイメージすると、目の前に自分とそっくりの人間が現れた。そいつは俺を見て、頷いた。

「じゃあ、君は、料理をして、俺は本読んでるから、俺の体に戻ったときに料理スキルのレベルアップもお願いします」

「お任せください、ご主人様」

どうやら、下僕として使えるらしい。俺はにやりと笑った。まだレベル1だから、一人だけだろうが、後々、俺は分身でこの図書館を制圧してやる。

俺の野望など無視したように、彼が料理を始めた。

俺はもう一冊本を見つめるために、探す。

何がいいかな。

見つけた本は『六次元』

であった。ちよつと理解に苦しむSFであった。六次元が存在する世界で主人公が戦う話であった。ちよつと怖い。

俺は、それを読み終わった。

――六次元の空間――

俺は、それを呟くと、空間に穴が開き、そこに何かを入れるスペースがあることに気付いた。俺は、なんだろうと思いつながら、まずは、石ころを入れてみた。シャッフルされるように、下からベルトコンベアーみたいなもので上ってくると、すぐに手に取れるように

してくれた。最低でも本が二万冊は入るくらいの広さだと思ってくれればいいだろう。

俺は途方にくれた。こんなわけの分からない空間をおしつけられても困る。何かのアニメみたいじゃないか。

俺は、笑いを隠しながら。早速、何を入れようかなと思ったが入れるものがなかった。

その時である。俺はある異変に気付いた。ベルトコンベアーにコピーと消去が存在していた。それと整理があった。

俺は六次元の中にあるベルトコンベアーを押してみた。

ベルトコンベアーとは下から上に運ぶ機械である。

コピーを押すと、石ころが二つになっていた。

俺は笑った。

この石ころは、あのむなしき銅像の破片である。

だが、そうおもって、そのむなしき破片を回収しに外に出た。

ひたすら回収して、空間に入れる。

やはりでた。

コピー、消去、修理があった。消去は三回押してくださいと書いてある。安易に消去されると困るからだろう。

そして、俺は、修理を行った。

そこには、変な銅像があった。犬みたいな銅像である。それを引っっこ抜いて、台に乗せた。これで、昔の罪は消えたはずである。

ほっとして、俺はにやりと笑った。まだ一人近くの待ちがあるために。俺はやらねばならないことがある。図書館に戻って、二冊の本を入れる。

そして、二冊の本の名前のところを指で一回押して、コピーを選択する。一冊が二冊になっていた。二冊目も同じようにした。

二冊が、四冊になり、四冊が八冊になり、八冊が十六冊になり、十六冊が、三十二冊になった。それを何回も繰り返し、百冊つく

ると、カウンターに並べた。
ブアンビーがやってきた。
そういえば、とっくに閉館していた。

「複製できたんだ」

「そうだぜ」

「ちなみに、体も複製できたでしょ」

「そうだぜ」

「まったく」

するともう一人の俺が戻ってきた、俺の体の中に入った。

「料理レベル41」になっていた。どうやら自分でやらないとレベル上がりの効率が悪くなるらしい。料理レベルに固執してないため、あまり意味がない。

「分身レベル2」分身も上がったようである。

俺は本をしまうと、事務所に入った。みんながわいわいでご飯を食っていた。今日は、マヨネーズのオムライスであった。見たことなかったぞ。

俺は、ご飯を食べた。俺がつくるより格段に上手かった。

「兄貴劇うまつす、二人いたみたいですけど、また力習得したんですか」

「そうだ、分身と六次元だ」

「わからないけどすごいっす」

ウルクーダが笑っていた。俺はというと、ちょっと頷くと、ご飯の続きを食った。

そうして、俺は、彼らの仕事ぶりを見直すことになった。

「今日で千冊集まりました。ルンダのカンダも五冊で十冊異界から持ってきたみたいです。手続きに時間がかかったみたいですがね」

「それはよかった」

「それで、俺は考えてみたんです、兄貴が魔法騎士を粉碎したのを見て、こうびびったとききました。兄貴、俺たちを率いて、図書館の国を作りませんか、兄貴が書いた小説みたく、図書館に人を沢山住まわせて、国づくりです」

俺はふうむと考えてしまった。

「ここならできるだろう、よし、いいだろう、まずは、人集めからだ」

「私の許可は？」

ブアンビーがこちらを睨む。

「もちろんいいわよ、それで、あなたたち、人の心あたりはあるの？」

「ないです」

「それなら、この森に行ってみるといいわ、ホームレスがいるから」

なぜか俺はホームレスを紹介されたのであった。

先が見えなくなり、そして、何を目指そうとしているのか分からなくなる毎日であった。

2 魔法騎士（後書き）

ついに図書館と言う国作りが始まります。彼らは何を目指すのでしょうか！ここまで読んでくれた方ありがとうございます、また見てください、拙い文章ですが努力して参ります。

3 美女ホームレス

朝の四時に目ざめた。爽快な朝であった。気分だけは上場である。
―分身レベル2―で二体の分身をつくった。

「ご主人様ご命令を」

「ご主人様ご命令を」

「お前は料理を頼む、お前は、掃除だ」

「お任せください」

二人の分身と分かれて、俺は、早速身だしなみを整える。まずはスカウトマンらしく、麦わら帽子をかぶろうかとおもったが、却下する、そんなスカウトマン知りません。

俺は、布の衣服を整えて、立ち上がった。そのまんまの足取りで、森に向かう。ブアンビーからの知らせでは、北の森に向かえばいいらしい、ホームレスは、森に生息しているらしい。数は分からないが、動物を食って生きているのだとか、インディアンかよ、と突っ込みたかった。

それ、ホームレスじゃなくね？ とか思ったけど。

俺は、ゆつくりと、北の森の中を進む、知らない本を掴み、使われていない箒を掴んだ。いつも使っているやつは分身が掃除している。

これさえあれば、俺は無敵である。なんつったって。

―箒を使うレベル80―

―本レベル100―なのだから、勇者だよこれ、完全に、本と箒の

勇者だ。

俺は、とぼとぼと歩きながら、森の中に目を配る。ブアンビーの話だと、ホームレスは金髪の女性らしい、話によると貧乳なのだから、しかも昔は勇者と、言われていた時期があるらしい。不思議だな、なんで、勇者がホームレスやってるんだろつか？

というか、このテルマーシ帝国に勇者がいない理由で、ホームレスに走ったから？

そんなことを考えていると、目の前で木から木を蔓で渡っている猿人がいた。正確には金髪であった。全身が毛皮に包まれている。

「アイヤヤー」

何語ですか？

そいつは、木に捕まっている鳥を一撃で捕らえた。

「ギガンドボール！！！！」

怒号、爆発、地震、炸裂、そして、森の木々が焼かれる音、鳥は丸こげというか、単なる骨になってます。

木々は倒れ、巨大な穴が出てきていた。そして、彼女がそこに座って、食事を始めた。なんと骨を食っていた。

「やっぱり軟骨はうめ」

そして、彼女は立ち上がると。祈り始めた。

「うっほうっほ」

インディアンかよ、突っ込みたい、でも我慢する。

「精霊たちに感謝」

すると、五秒で木々が生えてきて、穴がなくなった。

なんじゃこりゃあああ。俺は啞然と口をあけていた。焦げ後もなくなっており、そこには自然があった。そして、彼女はこちらを見るなり、にやりとほくそ笑んだ。歯が綺麗だった。どうやって整えているのか分からないが。

「あなた、何者、気配を感じた」

「俺はホンポというものです」

「そう、見たところさえない男ね」

「残念ながらさえませんよ、どうですか？ 図書館の国づくりに貢献しませんか？」

「いいわよ」

「それでですねって、いいのかよ、お前何のために、ホームレスやっただんだよ」

「単なる気まぐれ、お誘い来なかったし、国つくるの、楽しそうじゃない、私何ができるかな、そうだな、動物狩りくらいならできるかもしれないなあ、それと護衛も出来ると思うなあああ、あ、そうだ、まっちゃんつれてきていい？」

「まっちゃんって誰？」

「うっほうっほ」

人の話を聞け！！！！

ウェーブのかかった金髪、毛皮だらけの衣服、顔は美麗、そして整っている、細い、胸は貧乳である。そして、尻がでかった。な

ぜだ。この世界は不条理なのか。

そんなことを思っていると、一人のいかつい、木人がやってきた。

「うっほっほ」

お前らは何語を話してるんだ。そもそも、うっほっほで伝わるそれは何なのだ、どこかの異国後か？

しかも、木人！！！！

「こんにちは、マツボックリです」

「まっちゃん、この人国作るんだって、国つくろっよ、一からね、がんばろう」

「さえない、マツボックリです、このとおり、先ほど、彼女が殺した、同族です、なにか？」

「まっちゃんね、一応女性だから、デリケートなの、もうちょっと考えてあげて」

「マツボックリです、このとおり、木人です、ちなみに頭とれます、ぼろ」

頭もげた！！！！

「はい、もげましたね、次に足も」

「まっちゃんねマゾヒストだから、木を使ってあげて、気ながらにね」

「気と木をかけているのですね、さすが、ホームレスの鏡、さっき私の従兄弟を殺したくせに」

「まっちゃんね、私が変な魔法をかけたせいで、人になっちゃったの、許してあげてね」

「マツボックリと言いまして、このとおり、人と木の半端の仲で生きております、こいつは、ローザ勇者と呼ばれる人ででしてね、が

んばっていたそうです、ですが、一人がさびしいという気ままな理由で生まれました。マツボックリです」

「『静かにしろおおおおおおお』」

すると、二人はしゅんとなった。こいつらのテンションについていけねー、俺は、冷静になりながら、見守り、決めた。

「マツボックリさん、何が出来ます？」

「大工できますよ、木を殺して、建物を作れます」

「ローザ勇者さんは？」

「だから、動物狩りや、護衛にでもなんでもどうぞ」

「決まりだ。二人を図書館に招待します。マツボックリさんは、さつそく、図書館の中で何か作ってください」

「何かといわれましてもね」

「それなら、ブアンビーさんに聞いてください、あとで打ち合わせするんで」

「分かりましたよ」

「ねーね、私は？　なんかこうずばつといけない、ずばつと」

「恐ろしいこと言わないでください、あなたは、本でも読んで知識を蓄えてください」

「ねーなんで、こうずばつとずばつと」

「しつけないだよ」

「わかったわよ、そしたら、こうずばつと本を読むから」

「そこまで固執せんでいい」

はーはあ、付いていけない、この二人にはさすがに負ける。無理だ。今のところ、すめる場所は二百部屋までだから、そのうち二十部屋は使用されている、よって百八十人は入れる。今は、人口二百人を目指すのが、ブアンビーとの約束であった。

そして、みんなが、仕事ができるようなシステムにするとのこと。
彼女はシステムという概念を知らなかったので、悦明した。俺は、
今この二人を見定めている。まずは、この二人から様子を見よう。
一人人間じゃありませんが。

3 美女ホームレス（後書き）

メチャクチャな勇者ですがお見守りください、こう冷たい視線じゃなくて燃え上がる太陽な、こちら辺から方向性が見えてきます。アドバースがありましたらお願いします。

4 木人が大工（前書き）

ここでの木人は魔法の生き物です。

4 木人が大工

それから、彼等が、図書館の国に入国した。分身を回収して、残りものを食べると。

―料理レベル42―

―箒を使うレベル81―になっていた。それを安心して。

―分身レベル3―分身も上がっていた。

俺は早速木人と打ち合わせする。勇者には、外で門番の役目をさせている、そのうち知識を蓄えさせる必要があるが。

俺は、彼女、つまり、マツボツクリという三メートルくらいある木人に語りかける。枝があり、右腕と左腕に沢山の枝がある。足にも枝がある。

ずるっと動くのはホラー映画のごとく怖かった。

「それで、図書館二階建て計画は、どうでしょうか」

ブアンビーがさらっととんでもないことを発言した。二階まではあるが、図書館じたいを二階建てにする。つまり、上に作るということだろう、あのドームをさらに作ると断言しているのである。

「出来ますよ」

「無理だろ」

俺の突っ込みと木人の発言に違いが生じた。

「お前一人で出来るわけねーだろ」

「誰が一人でやるといいました？ おほほ」

なんかこいつキャラ変わってないか？ 今事務所で、会話中である。

事務所の殺風景な風景、テーブルがあるくらいだろうか。

「仲間がいます」

「動けーねーだろ」

「私の魔法で、動かすことが出来ます、ただし、一日、水を与えないと動きません、木人ではなく、木自体が動きます。枝が器用な手になります。それで、高いところでもいけます。ただし水を与えることが秘訣です」

「いいわ、水なら、そのバカがなんとかしてくれるわ」

「それなら、早速始めたいですね」

「お客たちには事情を説明するから、材料とかはどうする？」

「仲間を殺して、作ります」

「そう悪いわね」

なんかこの会話ブラックだ。危険だ。

仲間を殺して建物つくるってどんな心境なの？ 危険じゃね。危なくない？

「それで、ギャラのほどは？」

「んなもんねーよ」

「いやあげるわ」

なんと我らが主、ブアンビー様は素敵な人だった。

「あなたたちの体からつくった本を好きなだけ読んで良いわよ」

この人ちゃっかり悪魔だろ。俺は絶句した。

「ふむ」

木人押し黙る。マツボックリちゃん考えてるよ、どうするの？

「それは以外な申し出ですな、私たち木人には、そんな報酬はいらないのですが、このとおり目がありませんから」

「なくても本の感触は感じれるわよ」

この人悪魔だ。完全なる悪魔だ。

「ですが、インクの色によって、見分けることは出来ます、枝の感触で分かるのです」

「ほう、それなら」

「ですが、本は必要ありませんね、もっと必要なものがあります、私に毎日水をください」

どうでもいい報酬着たぞ、俺は絶句した。金とかじゃねーのか？俺はこいつの心が読めなかった。

「なんとかなる？ 下僕」

「だから下僕じゃ、すみません、下僕です。何とかなと思います、分身をつくって、水をあげるくらいなら」

そもそも井戸水があるだろうが、だが、毎日上げるとなくなるか？

「あなた水なら井戸があると思ったでしょ、しかし、それはいいけない、なぜなら、あれは人が飲むもの、お客だって飲むのよ、そこに木人が飲んでたら、怪しまれるでしょうが」

そこには変な、差別があつたのだが。

「それは建前、本当は、木が必要な水がとんでもないからできないの」

「どのくらいなんだ？」

「雨を一日分だから、あなたが水魔法を三時間ぶつ続けてあて続けないといけないの、そのマツボツクリちゃんにね」

「おい、質問がある、マツボツクリ、今まで水はどうしてた？」

「湖の近くで暮らしていたもので」

「お前の魔法が続く理由ってさ」

「そうです、水の力です、血液があるから動けるのです。水がないところでは生きていけません」

なんたる失策、だが、大工は必要である。

「交渉成立ね」

「はい」

「それで、釘とかはどこで手に入ればよいでしょうか？」

「それは裏にあるわ。今日から、ウルクーダたちに、色々と資材を買わせにいったのよ、釘とかなら安くていいし、木材は伐採するつもりだったしね、あとのこぎりとかも必要でしょ？」

「はいお願いします」

「一つ質問いいですか」

俺が尋ねる。しごく当然の結論。

「仲間を切り裂くのってつらくないの？」

「全然、低脳な仲間だと思ってますから」

「それってひどくないかな？」

「だって、私が魔法を与えないと、動けないんですよ？」

「そりゃそうだけど、君だって、勇者から魔法を与えられたんだろ？」

「勇者がさびしいから動いただけです」

「そ、そか」

「ですので、このマツボツクリ、悲鳴をあげて、涙を流して、仲間を伐採します」

「てか、悲しかったのかよ」

「悲しまないふりをするのが、淑女だと聞きました」

「そうか、すまない」

「ですが、これも面白そうだから付き合ってくださいよ？」

するとブアンビーが頷く、彼女も笑った。

「本当に面白いと思うわ、だって、図書館の国ですもの聞いたことないわよ」

「俺は、やりがいあるな」

「ごもつともで、では、マツボツクリ精進してまいります」

ずるつと動いて、立ち去ったマツボツクリ、事務所から出て、図書館を出るまで、お客の視線が痛そうだけど、我慢するんだ。マツボツクリ。

そして、俺は、立ち上がって、何をしようかと思うと、ブアンビーが呟いた。

「あなた、小説を書きなさい、神様に挑戦するのよ」

「え、今それどころじゃ」

「今だからこそかけるのよ、兼任しなさい」

「分かりました」

「いいわね、神様に及ばなくても異界で百冊くらいは手にいれられ

るような本をつくってちょうだい、二階が出来るころには、五万冊は必要だから」

こいつさらっとんでもないこと言いやがった。

「そのくらいの本があれば、そろそろ、有料と無料の使い分けができるかしらね、今まで、魔王からの寄付金だったけど、そろそろお金を稼ぎましょうか」

「どういうことですか？」

俺が尋ねると、彼女がほくそ笑んだ。

「だって、あなたたちの世界の携帯電話には無料サイト、有料サイトがあるでしょう？　ということは、一階を無料にして、二階を有料すればいいでしょう？　入場料一銅貨とかで、人を集めるのよ」

「考えましたな、それ以前によく携帯のこと知ってましたな」

「それでも、頭は回るほうよ、ちなみにあなたの小説で知ったのよ、あなたが飛び出てきた小説でね」

「ついでに、魔王からの寄付金だったんですね、今までの」

「そうよ、それと、私の資産ね、私の資産だけでもいけるくらいよ」
「ほほう」

「だけど、あなたにはお金を配りたいじゃない？　だから、あなたには自分で稼いでもらうの」
「なるほど」

つてええ？

「だから、二階は、あなたたちの力で集めた本を結集します。だから、面白くない小説があったら、クレームが来ると思ってください」
「ははあ」

俺は頭を悩ませた。こいつ、バカだろ、俺たちに本を集めさせて、それで有料化って、金を稼ぐのはいいが、人こなかったりしたらどうしようか？

太陽が真上に昇り、昼食時になるころに、はあとため息をついたのであった。

深く、そして、静かなため息である。

4 木人が大工（後書き）

ついに図書館商売が始まる前兆を見せます、ご期待ください。期待にそえなかつたら土下座して参ります。心のなかで！拙い文章ですがよろしく願います。

5 これぞパレード

「では仕事を始める、ナンバーワン、復唱せよ」

「イエッサー、ご主人様、俺は、一日中掃除します」

「ナンバーツー」

「イエッサー、ご主人様、俺は、一日中料理を作ります」

「ナンバースリー」

「イエッサー、ご主人様、俺は、一日中木々に水を与えます」

「よし、散れ」

「「「イエッサー」」」

どこかの軍人かよと突っ込んだかたそれはただしい、今俺たちは動いている。同じ顔をした、四人が揃って、四方に散ったのである。そして俺は、よっころしょつと。

二階の事務所に座って、小説を書き始める。

期限がないから、ゆったりと思ったとおりを書く、なんて素晴らしいのだ。

ここ最近の出来事をリアリティーに書いた小説を書こうと思っていた。あの魔王のとんでもない力、そして、勇者のバカ騒ぎっぷり、俺はそれらを目撃して、いわゆるネット小説っぽい小説を書こうと思ったのである。タイトルは『勇者と魔王がみなぎるぞ』なんかわけの分らないタイトルだが、女性二人に挟まれた主人公が、あたふたする物語である。

俺はこれを書こうと思った理由は単純に面白そうだったからである。そして、俺はペンを片手に、ブアンビーから与えられた本に書き綴る。今は、木人との打ち合わせが終わって、昼後である。昼飯はなしなために、俺は、おなががすいている。だから、せんべいを食っていた。

ふーむ何かこう面白い要素はないものかと考えていると、木々が雪崩のように動いていた。お客が悲鳴をあげている。ブアンビーが事情を説明している。

そして、木々が背負うように合体していくと。ドームの天上に張り付いた。その場で仲間を切断しているのは、木人ことマツボックリちゃんであった。

そこで水を散布している俺がいた。

しかも水魔法を連射している。ぜいぜいと叫んでいる。がんばれ俺。

そして、俺は、台所を見た。台所では料理人こと俺が、一生懸命に料理のレシピを考えている。そう最近、頭が枯渇してきたのである。自分たちで稼げといわれた通りに、料理でも稼ぐつもりであった。そのためのレシピ作りである。

そして、一階に下りて、あたりを見渡すと、沢山の人々が、本を眺めている。そこで掃除をしているのは俺である。

あの一万人の並びが、今では数千になっていた。

未だに長打の列だが、整理券があるため、みんな並ぶのではなく、座って並んでいる格好である。座って、本を読んで、ブアンビーが名前と番号を叫ぶと、人がやってくる仕組み、これは前にも紹介した。

最低でも百冊はある俺の本を次々と読んでいく彼ら。

俺はほのぼのとした、こんな最高な作品を作るためにはどうするか。

ルーサーが、本を並べている。

それを眺めながら。おばちゃんはどうだと考えて。

二階の事務所に戻った。

そこで、おばちゃんが最強な設定を考え、そのおばちゃんが忍者だとか色々な設定を加えていくあのおばちゃん的笑顔が生まれた。だがすぐに消した。こんな小説は見たくない。

そして、ひたすら書くこと、夜の六時、みんなでご飯を食べている。分身は全員回収した。

―料理レベル45―

―箒を使うレベル90―

―水魔法レベル10―

―分身レベル4―

どうやら、長い間使っていると、レベルは上がっていくみたいである。効率は悪いが、今の俺には充分すぎた。

ご飯はカレーライスであつた。みんな始めて食べる触感に絶賛であつた。

「これ上手いです」

ウルクーダが囁くと、勇者がご飯粒を飛ばしながら。

「ウルトラー、うめー」

「どこでそんなこと覚えた」

「なんか、ウルトラサラリーマンって小説を読んだ」

「そか」

俺が納得すると。

「はしたないですよ、この尻でか女目」

「ルーサー、ひがむな」

俺が囁くと、ルーサーが舌打ちした。

「兄貴、小説出来たんですけど、この後いいですか？」

「ルンダか？　どんな小説だ？」

「男と女のどろどろの恋愛です」

「うむ、あとで見せてもらおうか」

「俺も見てくださいよ、兄貴」

「カンダもか？」

「そうっす、俺は、魔物がヒーローになる小説です」

「ほう」

「そして、最後に食われる話です」

なんか駄目駄目勘たっぶりである。

「みなさん、静かに食べましょう」

ブアンビーの一言でその場にいる全員が氷ついた。

一人だけ、水の桶に入って、瞑想している木人を除いて。

彼女は、ただひたすら上を向いていた。水がずるずると吸収される。

俺は食後を終えると、何か小説を読もうと思ったので、一階に下りて図書館をめぐるうとして、ルンダとカンダに捕まった。俺はずるずると裏手の練習場に連れ込まれると、小説を見せられたなんてことが、この二人で今日の二冊が終わってしまう。

「私の最高傑作よ」

「俺の最高傑作っす」

まずは、ルンダから眺めていく、『男と女の醜い争い』そのタイトルにひきつけられた。卵一つで殺しあうカップルであった。なんかすげー、俺にはない最高傑作だ。そもそも卵一つで殺しあうって、サバイバル感たっぷりだ。最後には、男と女が愛し合って、浮気相手を殺しあった中になっていた。こええええ。

――駄目な恋愛レベル――

必要ねええええ、こんなスキルみたいなもの必要ないぞ、覚えなくてもいい。

次に『獣の最後』というのを眺めた。なんじゃこりゃ。魔獣が旅を続け、ヒーローになっていく、みんな盛り上がって、勇者の一行になる、ここまでは良いぞ、確かにここまではいいんだ。そして勇者が腹減ったといって、主人公を食べて終わってしまった。なんじゃこりゃあああ。絶叫もんだぞ、しかもリアルに食われるシーンが描写されている。

獣の最後だなこりゃ。

――獣の言葉レベル――

だから、必要ねーと言おうとして絶句する、いやまってまって、なんだ、このとてつもない便利な能力、知らなかったぞ、こんな便利な能力があるなんて、俺は、驚いた。とにかく二人に微笑み。

「面白かったぞ」

「「本当ですか」」

「だが、直すべき点もある、まず、恋愛についてだが、知らないが、卵一つで殺しあうのはやりすぎ、カンダにいたっては、獣の最後を表現したかったんだろが、何のためのヒーローだったのか理解で

きない、以上」

「「はい」」

俺はただ微笑み、とぼとぼと歩いていく、ウルクーダがこちらを見て微笑んでいた。俺は、二階の事務所に戻ると、書き始める。今日の覚えるものが終わってしまったせいか妙に脱力感があつた。俺は、ただ椅子に座って、思案を続けた。どんな物語を神様は所望しているのだろうか。

俺はそこに至っては、素人である。そこで、プロの意見を聞くために、――透明化――を使って、彼女の部屋へとひっそりと侵入しようとしたが、案の定、巨大な胸をさらけ出しているわけでもなく、布のパンツ一枚で、寝転がっていた。

ぶおつと鼻血が噴出するまえに、冷静になって見つめた。これは、思ったら人形でした。上から何かが落ちてきた。うおおおお。

ということで、制圧されました。

上には、ブアンビー様が君臨しています。

「お前人形にパンツ着せるって、考えたな、しかも天上に張り付くってお前は妖怪か！」

「ほめ言葉ありがとう、でも一度だけでも妄想できたことに感謝してちょうだい」

「お前俺がくることわかったのか？」

「あなたが透明化を使った瞬間に分かったわ、あれは空気中の分子を使うから、すぐに反応できるの」

「くそっ、いつか、いつか、気配を消す、能力覚えてやる」

「期待しているわ」

制圧から開放され、そして、俺は、土下座中であつた。

「ところで、神様はどんな小説を御所望で？」

「そうね、しいて言えば、こねくりまわした小説ね」

「どんな小説だよ」

「それを言うなら、設定を沢山備えた小説ってことね、神様は単純な小説が大嫌いなもの、例えば、少年Aが浮遊能力を使う、それは特別だからってのが嫌いだね、その少年Aが遺伝子操作されてとか、そんなリアリティーある話がすきな」

「神様現実派だな」

「でも、英雄は違うわ」

「そんなのいたのか」

「いるわよ、英雄は神様になる寸前の人で、異界にいるわ、彼らがついている小説はレア度が高いの、だから、英雄の好きそうな小説は、しいていえば、厨二病の小説よ、あなたたちの世界でいう中学二年生が抱く妄想よ」

「なんかそういわれると、嫌だな」

「でもこの世界ではそういった人は希少な、だからあなたは、特別な才能があるのよ」

「でもさ、思ってたんだけど、その小説が神様に好かれるか、英雄に好かれるかどっかわからないだろ？ どうやって決めるんだ？」

「それは、魔法を使って、送るのだけでも、その前に魔法で展覧会を開くの、ルンダとカンダはお手の物よ、それで、オークションをしていくの、大抵は一人の神様が選べばみんなあきらめるは、なぜなら、神様は質のいい本を出すし、私は専属契約で、一冊につき二冊だけど、専属じゃなかったら、一冊で五冊とか出してくれるところもあるわ。オークションにかけられると、千冊とか当たり前、でも神様はそんなに自分の宝を出そうとしないの」

「なるほどな、それが神様の現状ってことだな」

「だから、専属契約が好まれるのよ」

「俺はどうすればいい？」

「まずは、異界、天界に展覧会に出して、オークションさせることね、天界では一冊でも、異界では数万冊ってことはありえるのよ、つまりね、そこは著者が選ばばいいの、数がほしいなら、異界で、質がほしかったら天界で」

「なるほどな」

「だけど大抵は異界でスンドまりよ、私のように天界と本の交渉を結ぶのは難しいはずよ」

「つまり、俺じゃ無理か？」

「そうね、今のところは無理だけど、こう、本気をだせばね」

「ありがとうございました。これから精進してまいります」

そして、俺の小説書きモードが開催されたのであった。

夕闇は濃くて、そして、とても、気持ち悪くて、空は何も見えない、先が見えない、それが俺の人生そのものであった。

5 これぞパレード（後書き）

頑張って書きますので、見てやってください。

6 ホンポ取材中（前書き）

ついに図書館から出ます。すぐ戻ってくるけど。

6 ホンポ取材中

いつものことながら、朝の四時に目ざめた。俺である。

「分身レベル4」

を使って、四体の分身をつくる。朝の四時から木人の作業が始まる。昨日より数を増やすといていた。

「では、反復せよ」

「イエッサー、ナンバーワンは掃除をする」

「イエッサー、ナンバーツーは料理をする」

「「イエッサー、ナンバースリーとフォーは水魔法で、木人を援護」

」

「よろしい、散れ」

次は五つに散った。

そして、俺は、裏手に回って、一つの花柄の部屋に乱入した。そこでは、勇者が、裸で眠っていた。ぶお、つつぶお。

鼻血が止まらない。死ぬ、死ぬぞ。

俺は朦朧としながら、叫んだ。

「勇者取材にいくぞ、お前らの国を見せろ」

「うにゃ、そうか、行くか、よし、着替えるぞ、見てないで手伝え」

なぜか、俺は彼女の素っ裸を見ながら、着替えを手伝えさせられた。毛皮をまとうていく、なんたる白磁の桃色に輝く太もだろう、やはり尻はでかった。そして、なんたる胸の小ささだろう。俺は啞然としていた。

そして、彼女が下着をはいて、胸にブラみたいなものをつけて、次に、毛皮をまとうていく、その工程を眺めていた。鼻血はなんと

か力で止めた。

「では参ろうか」

「参ろうかじゃねー、裸で寝るな」

「いかんか？」

「いかんぞ、裸は危険だ」

「分かったこれから裸で寝よう」

「なぜ、そういう会話になる？」

「知らぬか？ 女性は裸で寝ると、胸が大きくなるんだぞ」

「そんなわけのわからない屁理屈をこねるな」

「だって、毛皮があついんだぞ」

「わかったよ、後で、ブアンビーにパジャマをわけてもらうから、さすがホームレスだな」

「すごいだろ」

「すごくねーよ」

「ところで、どういった気分の変わりようだ？ お主は、他の国に興味がないとばかり思っておったぞ」

「国が見たいんじゃない、世界を知りたい、この世界について」

「ほほう、なるほどな、私も森を知ったぞ」

「お前は単なるホームレスだろうが」

「悪いかな？」

「悪くネーけど静かにしろ」

そして、俺たちは、お金を持たずに、本と箒と、彼女は、なぜか短い剣をもって、旅を始めた。誰にも告げないたびであった。ブアンビーには昨日告げたけどね。

俺は、とぼとぼと歩きながら森の描写を考えては、――博士――を使って、脳内にメモしていく。色んな描写があつた。そして、湖を見つけた。あそこが、木人の故郷だろう、しばらく歩き続けること、三時間で、腹が減ってきた。彼女が丸こげにしたイノシシを食った。

とつてもまずかつたし、その後はいつもどおりお祈りをして、自然を回復させていた。

俺たちは、夕方くらいに指しかかろうというところに、森を抜けた。北をずっと北上していたのである。たどり着いた場所は巨大な城壁がある国であった。門番がいる。俺は何か身分証明なんか必要だつたらまずいなとか思っていたが。通ると頭を下げられた。

俺にはではなく、彼女に頭を下げているようだ。

「国はいいぞ、服は無料だし、酒も無料、風呂も無料、食べ物も無料だ」

「お前、落ちは無銭飲食ってことじゃないだろうな」

「違うぞ勇者だからな」

「なんか駄目な勇者だな」

「なんで、ホームレスになったとおもっただろう？」

「思ったね」

「それは、みんなに期待されなくなったから、飛びぬけてきたのさ、必要ないものは必要ないってね、でも一応、威厳はあるわけだ。勇者だから、なんでも無料と決めたのは国王であるからな」

「なるほどな」

「駄目な勇者でも結局民はがんばって無料をお送りするんだ。私はそれに堪えられなくなったのだよ、気性があらくてな」

「そうか、なぜ、気性があらいのかは知らんがな、あのうつほうつほだろう？」

「うつほうつほ」

すると、守備隊が同じように真似てしまった。

頭に？マークが付いてきた。そんでもって、俺は口をあけて。

「お前何変なこと仕込んでんだよ」

守衛たちはてれながら、やり終えると、見つめてくれた。
俺たちは、門をくぐり、しばらく歩き続けた。

まずは酒場の取材だ。金はもってないから、食えないのでって。

「人の話をきけいいいい」

勇者はさっそく、おばちゃんにさそわれてビールを飲んでいた。

「おい、こいこい、ただで食えるぞ」

「おめーだけだろ」

「オバちゃん、こつちの人にも頼む」

「それは、いけないわよ、勇者様彼は普通の人よ」

「そうです俺は普通の人です」

「いや、私の弟子だ。未来の勇者だぞ」

「なんたる栄光か」

そして、俺もビールをただで、飲むことになってしまった。オバちゃんすみません。飲み終わると、俺は、酒場の中とか、おばちゃんの姿とかを確認して、脳内にメモしていく、傭兵みたいな人たちがビールを飲んで、だべっている。商人もいるし、お姉さんもいる。お姉さんにお金を渡すと、上の階に紹介されるみたいである。しかも一枚金貨だし。何を紹介してくれるのか勇者に尋ねると。

「ああ、あれか、いやらしいことが出来るぞ」

「お前やったことあるのか？」

「いや、昔師匠がやってきて、ほんわかしてたぞ、童貞を捨てたつて、いばつてた」

「そ、そか」

つまり、娼婦なのだろう。

俺はとてつもなく興味があるが、何か、得たいの知れないものがあるため、やめておく、ブアンビーあたりに殺されかねないので。

酒場を後にすると、階段上に街がどんどん上へと上がっていく、民家は沢山あり、公園みたいな場所で子どもたちがボール遊びをしていた。夕方でも元気である。そして、傭兵がうようよいいる。軍隊もいる。軍隊は規律が揃っているのかきびきびと動く。

魔法騎士も見かける。ジンが、目の前を通り過ぎ、震えだした。

「お、おまえ、おまえはあああああ」

「きゃあああ」

と言って、女性の魔法騎士がやってきた。そして、俺は、微笑んで、ジンを見つめた。

「この前はすみませんでしたあああ」

なんか謝られた。そして、ジンは手を出す。

俺も手を差し出し握手した。

「ところで、今日はどうしたんですか？」

「今までの態度はなんだったんだ」

「気にしないでください、ハニーたちは、仕事にいつてくれ」

「「「「はい」「」」」」

ハニーたちって、すごい名前だな。

「小説を書くから取材に着たんです」

「なるほどな、俺を取材しないか？」

「いいですけど」

「そいつは誰だ」

「この人は、ジンって魔法騎士で、あ、っこちらは、勇者です」

「勇者様戻ってくれましたか」

「いや、また出るぞ」

「そんな殺生な」

「人の話聞いてる？」

「すみません、俺を取材してくれますか？」

「いいけど、何か面白いことあるの？」

「面白いことというか、これから、仕事ですけど」

「俺は近づけないだろ」

「いえ、そこは、王様にもかけあって」

「そんなに大げさにしなくていいから、俺は街を見るからさ、今度紹介してよ、あのハニーたちを」

「もちろんです。今度会いましょう、ではいつか」

そして、彼が立ち去って、俺たちは、ゆっくりとさらに上に向かった。二階の階層になると、商人階級の人たちが暮らしているようである。身なりがよさそうな子どもたちが見える。

商店街を抜けて、三階層にいくと、貴族みたいな人たちが談笑していた。

さらに上にいこうとして、近衛兵に止められた。

「これより先は国王様の領地です、なに、勇者様ではありませんか、

探しましたぞ」

「私は用事がある、これより秘密作戦だ」

「な、なるほど、国王からの密使ですな、お気をつけて」

「なに、また消えるだけだ」

「何か不穏なことを聞いたような」

俺は微笑みながら。

「では戻ります」

「またの機会に、あなたの名前は？」

「俺はホンポといいます」

「なんだと、あのホンポ様ですか、平和とはという小説を書いた。俺見ました」

「そうですか、いえいえ」

「通ってくださいぜひ、国王様にその顔を」

「そうですか？」

ということ、俺たちは、国王の城にと足を運んだ。なんだか重たい足である。うるさそうな人がいなければいいなとか思いながら、きらびやかな城を眺めて、絵画や、銅像を眺める。噴水があり、貴族令嬢が微笑みながら歩いている。

そしてすれ違ふとくすりと笑うかと思ったら、みんな頭を下げていた。もちろん、勇者にである。

そして、俺はついに、登場したくない場所にたどりついた。国王の間である。

扉を開ける前に心の準備をしていると。

後ろから笑い声が聞こえた。

6 ホンポ取材中（後書き）

勇者は何でもただですませれると言つような夢の国です。そんな彼女は罪悪感で国を飛び出して主人公と出会いましたとき。拙い文章ですがどうか見てあげて、ここまで本当にありがとうございました。

7 王様の娘は勇者（前書き）

勇者の素性が！！

7 王様の娘は勇者

後ろの笑い声の正体は、王様たちであった。彼らはこちらを見ると、鋭いまなざしを向けて、勇者を指差した。

「お前は、良くぞ帰ってきた」

「すぐ出るけどね」

「まあいい、我が娘よ」

「お父さんなんて最低な親だけどね」

「それで、君は？ ほほう、小説家ではないか」

王様は髭をくるくると巻きながらこちらを吟味している。一人の執事っぽい人がでてくる。

「まあまあ、まずは、部屋に入って」

「分かりました」

位置直し中。

「さて、質問に答えようか」

「つて、なんで、俺が玉座に座ってるわけ？」

「褒美じゃ」

「そんな褒美いらないから、王様変わって」

「いやだ、たまには下々の気持ちを味わいたい」

「そうだぞ、お父さんはたまには下々になるんだぞ」

「てか、なんで、お前は王妃のところに座ってる。王妃さん、椅子に座ってるじゃないか」

「気にしないでください、我が娘にもちよつとした体験を、ごほい」

ほ」

「病気じゃないか、お母さん、病気じゃないか」

「うるさいぞ、ド畜生も、それで、お父さん、彼の質問に答えてあげて」

「いやそもそも、質問なんてなかったんだけどね」

俺は考える。この状況、なぜか、玉座に座り、王様一同を下々のところに位置している理由、なぜ？ まあ、気にしないでください。俺は、まず最初に質問した。

「戦争はやってませんか？」

「魔人とはやっていないが、ラット国とはやっているぞ。あやつらめ、自分たちの国が繁栄している理由がテルマーシ帝国のおかげだとも知らずに」

「俺がやった小説の意味は？」

「意味はあったな、あったぞ、安心しろ、戦争といっても、政略だからな、軍事は動かしてない」

「よかった」

「だが、勇者が戻ってきた、さつそく、進軍を開始せねば」

「いや、私すぐに外に出るから」

「な、なぬううう」

王様シヨックを受けている。

「我が帝国が大事じゃないのか？ 我が娘よ、いやローザよ」

「うん、大事じゃない、クソみたいなもん」

「そうか、分かった。近衛兵、こやつらを捕らえろ」

ええええ、玉座からまったく話が変わってるぞ、捕らえるだって？ ふざけるな、俺は単純に取材に來ただけなのに。というか、な

んだ、これ、俺は箒と本を構える。

「お前は手を出すな、俺が相手する」

「頼んだぞ、腰が痛くてね」

「お前は、まだ若いだろうが」

近衛兵、続々と現れてます。百人くらいかな？　しゃれにならんなわ。

ということで、本を構えます。この王の間はドーム状になってます。この国ってドーム好きなのね。俺は、本を構えようと。本棚を見した。にやりと笑った。

要らない本をまずは、分投げる。近衛兵がおわつとって、逃げ待とう、本がドームにぶつかって、跳ね返り、何度もバウンドして、空中を躍る。

そして、俺は本棚から片っ端から本をつかみ、分投げる。

―本レベル100―は伊達じゃなかった。本が鞭のごとくしなり、近衛兵を片端からばこぼこにする。王の間もぼろぼろになる。王様は悲鳴をあげ、王妃は、ゆらりと寝ている。

本が躍りまくる。

「さて、行くぞ、勇者」

「承知」

二人が立ち上がり、みんなが、慌てている中を通りすぎて、正門から抜けたのであった。なぜか、追ってはこなかったが、気にしなかった。そして、俺は、まだ見ていないものを見たいから、城門の上にと登らせてもらった。勇者の特権を使用してくれたようである。

俺はそこで、ずっと空を見つめていた。そこに何かがある気がするからである。不思議な感覚なのである。大事なものがある。

そんな気がする。永延と思われる時間をすごした。ついに朝日が昇った。太陽が昇る。そして、世界を夕闇ではなく、朝日で照らす。この世の始まりを告げるゴングであつた。

俺は涙を流してそれに感動していた。そして、勇者は鼻くそをほじっていた。一度ぶん殴っておいた。そして、俺は、朝日を見終わり、この国を後にした。見たかったものは見れた。そして、後ろからは騎馬隊が襲ってきた。それも百人、ぼこぼこにされた近衛兵であつた。

俺は、森の中に入り、勇者とともに、隠れた。近衛兵はどこかへと向かつてしまった。どうやら、図書館に向かったようである。何か得たいの知れないものを感じてしまった。

まずいな、ちょっとまずいかもしれない。

そして、俺たちは走り始めた。森の中をゆっくりと走る。

「なあ、嫌な予感がするんだが、気のせいかな？」

「そうか？ 大丈夫だと思うぞ、あそこにはブアンビーがいるし、近衛兵にやりたいことはさせないと思うぞ」

「そうなのだが、俺がいた時点で、王様は図書館にお前がいると予測したんだろうな」

「ほづか、なるほど、それは考えなかったな、して、どうする？」

「どうするって、近衛兵の無事を祈るしかないだろ」

そう俺たちの心配は図書館ではなく、近衛兵の安否であつた。

湖を通り、森の中を通り過ぎ、そして、図書館にたどり着くと、そこには百人の近衛兵が倒れ付していた。

皇女様のように、光臨しているのは、ブアンビーである。

彼女は、何事かを呟いている。

「図書館の掟第一、図書館では静かにする」

「図書館の掟第二、図書館では、武器を持たない」

「図書館の掟第三、図書館で暴力を働かない」

「よって、守れなかったものには死罪を与える」

ブアンビー様が、包丁を片手に振り下ろしたと思ったら、鎧を脱がせていた。

近衛兵が全員恐怖の声をあげている。

「そして、ためーらは問題を起こした、何が勇者を帰せだ。勇者は自分の意思できたの、あんたらに指図されるいわれはないし、ここは中立なの」

「はいはいはいはい」

近衛兵震え上がっている。

全員の鎧を取り終えると。

「ウルクーダー、これを商人に売って来い、お前らにとって、これは大事な鎧だ、返してほしくば、働いて、返してもらおうか」

「それは、なぜですか、俺たちは、帝国の意思で」

「なんだ？ お前、殺すぞ？」

「すみませんんん」

「それでだ。お前らに、この鎧を返してほしくば、あそこで、木人

「が作っている建物の手伝いをしなさい」

「そんな」

「安心しなさい、今日一日だけだ。それを守れば、鎧を返しましょう、守れなかったら、ウルクーダ分かってるな」

ウルクーダがにやりと笑う。

「はい、もちろん売りさばきます」

「「「「ひいひい」」」」

「それで、お前ら働くか？」

「働きます」

全員が叫んだのであった。

さすが鬼教官わかってらっしゃる。怖いけどね。

俺がそこにいくと、勇者がにやりと笑っていた。

「遅いぞ、帰るな、エッチなことしてないだろうな」

「大丈夫だ。お前に心配されるいわれはない」

「それはよかった。お前の分身たちが、すごい働いてるぞ」

「そか」

「それで、飯にするだろ？」

「はい」

「まあ、分身がつくった飯だがな、もうつかれたわ、まったく、この子たちと相手するのに本気だしちゃったんだから、受付の仕事だつてあるのに、もう」

彼女の本気を見たかった気がしたが、怖くて見れないと、思ったのであった。

風が冷たく吹いていた。

まだまだ夏だなーと思った。

7 王様の娘は勇者（後書き）

お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。評価されると喜びます。駄目な文章力ですがどうぞよろしく願います。図書館は完成するのか？期待してください。

8 オークション

―分身レベル5―

―箒を使うレベル110―

―料理レベル60―

―水魔法レベル30―

驚異的なレベルアップに俺は驚きを隠せない。分身たちが消え終わった後。俺は、また分身を起動した。

―分身レベル5―

「ナンバーワン 掃除をする」

「ナンバーツー 料理をする」

「ナンバースリー 木人に水魔法を与える」

「ナンバーフォー 近衛兵の見張り」

「ナンバーファイブ カウンターでお客の見張り」

「全員、仕事をきばっていこう」

「『『『『イエッサー』』』』」

ここは軍隊ではありません。

そんでもって、俺は一般市民で、単なる小説家でございます。俺は、事務所の二階にて、本を眺めながら、ペンを振り絞った。色んな角度から見る本は大好きであった。

そして、物語をつむぐ。勇者と魔王がみなぎるぞ。俺はそれを書き綴る。

勇者は国のお姫様、魔王と太陽に向かって走るシーンがラスト、だが、それで終わっていない、続編に続く。

やっと、一冊書き終わった。続編は、どうするか、ブアンビーからあらかじめもらっておいた本をめくり、続編を書き始める。

そこでは、魔王と勇者がみなぎって、闘って、惑星を制覇する話
が描かれている。永延と続かれる物語、終わりがないみたいだ。そ
して、最後は、勇者と魔王が老人になって、終わる。そこに挟まれ
ていた主人公は、みなぎって、死んだ。

みんなグッバイ、老後をグッバイ。

そして、物語は終わった。

ぜいぜいはあはあ、息を吸う。もう、夜中であつた。

そして、夕食を一階の事務所でみんな食っているみたいだ。

俺は血でも吐くんじやないかと、恐ろしくて、とてもじゃないが、
動けなかった。ゆっくりと世界になじみ始めて、空気を吸い上げる。
そして、一階に行くと、みんながこちらを見ていた。どうやら近衛
兵は帰っていったようである。

そして、俺はというと、くらりと倒れながら、椅子に座って、飯
をかき込む。

今日はオムライスであつた。上手かつた。

そんでもって、卵スープもある。

色々と口の中にかき込みながら。色々と思案しながら、沢山のこ
とを思い描きながら、俺は、みんなの言葉を待っていた。みんなは
雑談しながら、食っていた。

俺は、というと、この世界にいないみたいだなと感じたのだが。

「あなた、小説は出来たの？」

我らが頭領は、甘くなかった。

「ああ、出来たぞ」

「それなら、添削するから、持ってきたさい、ちょうど食い終わつたし、あなたも食い終わつたでしょ？」

「ああ、そうだな、ちよつと待ってくれ」

俺は、一度、台所に行くと、料理人を回収しようかと思って放置した、ずっと料理つくってくれ、しばらくしたら回収しよう、どうやら、長い時間を働かせると、レベルアップの効率がよくなるみたいだ。なら、外の水やりもちよび休憩させながら、木々に与えてやってくれ、箒掃除もたのむ。そして、お客の見張りは、ずっと、おばちゃんの寝姿でも見張ってくれ。近衛兵の見張りはどうしようかと思つたが。一度外に出て、ただぼつと突っ立っている人物を発見。

回収しておく。

――勇者の技レベル10――

ええ？ なぜに？

どうやら、近衛兵が逃げようとして、攻撃したらしい。

回収してよかった。

そんでもって、図書館を眺めると、カウンターでじつと本の群れを眺めている俺がいた。

「がんばってくれ」

と呟き。俺は、とぼとぼと事務所に入ると、そこでは、ブアンビ―が腕組みしてまっていた。俺は、二階にいった、本をとると、一階に戻り、彼女に本を見せた。

みんな食事が終わったのか、それぞれの仕事や休憩に繰り出していた。

そして、俺はというと。彼女の威厳のまなざしに照らされながら、小さくなりつつも。

「面白い、これなら、いけるでしょう、ちょっと残念なのは、勇者が単純な魔法使いになっているところね、これは神様レベルには達してないわ」

「そうか」

「でもチャレンジャーしてみましよう、ここで、展覧会開くけどいい？ 大抵五分で決まるから」

「お願いします」

「あなたがやるのよ、まずは、自分の真名を呟いて、その後、本に触れて、展覧会開始と叫べばいいわ、異界と天界と呟いてね、ほら、やって」

「はい、出山本保 展覧会開始 異界と天界」

いきなり、世界が薄闇のようにぼやけ始めた。そして、二冊の本が宙に浮くと、まるでテレビの向こう側にいつてしまったように薄ぼんやりした。

そして、しばらく待つこと。

その空間の壁に名前が出た。

―セイヤールさんが購入しました。天界本四冊です。

―パパードさんが購入しました。異界本三千冊です。

―オークションしますか？

俺は啞然としながら、考える。パパードさんは天界の人が購入

してもあきらめなかったみたいだな。俺はその勇士に頷いた。

―イエス。

―セイヤールさんが＋十冊出しました。

―パパラードさんが、＋二千冊出しました。

―イヤールラムさんが乱入しました。異界本一万冊です。

―セイヤールさんが、＋二十冊出しました。

―パパラードさんが、＋五百冊出しました。

―イヤールラムさんが、＋一万冊出しました。

うつむ困るな。というかこれどうすればいいの？

エンドレスに続く、交渉。

いつしか、とんでもないことになっていた。

―セイヤールさんが合計、千冊を出します。

―パパラードさんが合計五万冊出します。

―イヤールラムさんが、十萬冊出します。

―では決めてください。

決めれるかああああ。なんだ。このとんでもない桁は、天界も必至だな。こんな小説のあらすじのどこに惹かれたんだ。そうだ。忘れてたあらすじも書いてたんだ。それしか見れないように設定されているらしい。

そして、俺は、決めた。

やはり、まずは、天界の本からだ。

ーセイヤールさん落札です。本を出す場所に移動してください、大量の本ですので、広い空間にお願いします。

この交渉している人はきっと商売人だろうか。

俺は、ドーム裏の練習場に移動する。そこには一万冊くらいの本が積み重なっていた。

そして、俺はイエスの覧に手で押した。

俺の本が向こう側に消えた。一瞬顔が見えた。

とてつもない、美しい女性がこちらを見て微笑んでいた。そして、白い羽、なぜか、薄いカーディガンみたいなものをはおって、胸がチラッと見えた。ピンク色だ。

そして、俺は啞然としながら、目の前に積み重なる本の大群にびびっていた。

千冊が揃ったところで、俺は一息いれろと。

ブアンビーがきた。

「どうやら、取りこしぐろうね。セイヤールはね、誘惑の天使だから、一度見たからって、また同じ人ばかりに選ばないほうがいいわよ」

「うんわかった」

「それでどうだった？」

「スリルめっちゃあった」

「そうでしょ」

「また書きたい？」

「うん、書きたい」

俺は、さらに小説を書く気満々にさせられた。これから書きまくってやる。その前に、天界の本二冊を適当に選んでみよう、ねたになるかもしれない、図書館にもあるのだろうけど、どこにあるのが分からない。

この千冊の上に、紙で、これは天界の品ですと書き綴り。

ウルクーダたちが呆気な口をあけて、びびっていた。

俺は、微笑みながら、その足で、カウンターに戻った。隣ではルーサーを監視している俺がいて、そして、俺は小説を読んでいた。

8 オークション（後書き）

ついに天界と異界での本の入手の仕方がリアルにかかれます。ここを書きたかったのです。別の世界の住民がオークションするシーンを拙い文章ですが努力して参ります。心のなかで自分に素晴らしいものを書けと怒鳴っているので見守ってください。

9 第二図書館

『聖戦士オツパイヤ』

『天使の羽』

この二冊を読み終わって、習得したやつは。

―武器オーラレベル1―

―翼化―

であった。

分かったこと。武器オーラレベルは、箒を握るとオーラが輝いた。それで、岩をちよんとつくと壊れた。攻撃力が上がるらしい。次に翼化は、背中に翼を生やして、空を飛べた。箒で飛ぶことも出来るが、こっちのほうが、安心できる。

聖戦士オツパイヤの内容はとてつもなく面白かった。オツパイの称号得た。ヤという人物が闘う生き様であった。次に天使の羽は羽をもがれた天使の話であった。

感動の嵐。さすが、天界の本である。

こんな素晴らしい能力を授けてくれた。もう感謝である。次に俺は、寝ることにした。もう深夜の零時である。宵闇が薄ぼんやりとしている。マツボックリちゃんが事務所で寝ていた。水桶に浸かりながら。

「今日はもう遅いですよ」

「そうですね」

「ですが、今宵は楽しみください、最高のおもてなしの嵐ですから」

「何ももてなしを受けてないぞ」

「それがおもてなしです」

「つまり？」

「もて、なしという意味です」

「そか」

「上手かったですか？」

「まあな」

そして、俺は、二階の事務所で寝ることにした。布団が埃まみれだが気にせずにごさつと入ると、廊下の向こうのブアンビー様の部屋が気になるが、今は気にしないでおう。

そして、俺は意識をクールダウンしていくと、目が覚めた。

ごうんごうんと音になる。朝の四時である。

さつそくおきだして、頭の中で号令をかける。

続々と現れる。メンバーたち。まずは、全員を吸収しなくてはならない。

――分身レベル6――

――算を使う120――

――水魔法40――

――料理レベル65――

四人が戻ってきた。

どうやら彼らも寝るようで、レベルアップの効率性は見えなかった。まあ、仕方ないだろう。そして、またまた分身を作る。

「俺は掃除をする」

「俺は水魔法」

「俺も水魔法」

「俺も水魔法」

「俺は料理をする」

「俺は、客を監視する」

「では、みなさんきばっていこう」

「『『『『『イエッサー』『』『』『』」

ちよつとずつみんな打ち解けてきたのか、短い文章になつていった。

そして、俺はというと、昨日の教訓を得て、次なる小説の執筆にかかる。どんな小説を書こうか、脳みそをフル稼働させる。

――博士――を上手く活用して、脳みその中のデータを参照していく。そして、今自分が書きたいのが何なのか、見えてきた。それは、どんな小説なのだろうか？

見えてきたのに見えなかった。ようく考えてみると、やはり見えてきた。そして、俺は決めた。

『王様が魔物になったら！！』

こんな小説タイトルを考えて書くことにした。まずは、ブアンビ様のところにご訪問である。彼女は受付で色々と準備をしている。彼女のところに向かって、頭を下げてから。

「本をください」

「私の部屋にあるわ。かつてにとって」

「ありがとうございます」

「それと、下着を見ようとしたら、自動的に罾が起動するから」

「はい」

俺は、とぼとぼと二階の事務所にいつて、廊下を通過して、ブアンビ様の部屋に入った。そこには無数の本があった。まずは一冊手

にとって、中身を見る、何もかかれていない。

そして、俺は、事務所に戻ると、小説を書き始めた。時間の感覚など忘れてしまうほどに、どっぷりとつかっていた。不思議な快感である。気付けば夜になるなんて当たり前である。

俺の意識がクリアになっていく、まるで変な薬を飲まれた人みたいである。

もっと冷静になれ、もっとクールになれ、もっと沸騰になれ。色んな言葉を脳裏にかすめながら。

俺はそこに向かっていった。そして、俺が向かっている先にお花畑があるのだろうか。きっとある、そこにはお花畑がある。

そして、そこに向かえば、きっと未来がある。

その時である。

「出来たぞー、これぞ木人スペシャル。マツボックリちゃんのできばえだああああ」

雄たけびが聞こえた。俺は、眼が覚めた。そして、気付けば、小説を書く手をやめて、窓をあけて、上を見た。すると、そこには巨大な、そう、巨大な建物があった。デザインはダークな感じで、エンジェルが含まれている。変な宗教家を作ったようにも見えるが、ドームの上に変な彫刻があると思っ正しい。

俺は一階に戻ると、木人がはしゃいでいた。彼女についていってべつな階段から、新しく出来た階段を上り、結構な長さである。それを上ると広間に出た。ご大層に棚まで並べられている。

数はざっと、何百万冊くらい入るだろうか？

棚は上まで三十棚まであり、横だけでも、五百棚はある。これが、俺の商売の始まりをつげ、そして、国づくりの始まりなのだ。

俺は拳を振り上げて、高笑いをしそうになったが。木人を抱きしめた。その時に頭がもげたが気にしない。

頭を接続して、彼女がえいえいおーと叫んだ。

そして、俺は意識を失った。

目が覚めたら、頭にタオルをつけられ、冷やされていた。事務所の布団の中に入っていた。そういえば、ベッドで寝ていた記憶もあった。どこかの部屋だった気がするが。だが今は事務所で寝ている。そのために布団である。

ゆつくりと目ざめると、ブアンビーがこちらを伺っていた。

「無理をするからです。高熱でしたよ」

「そうか、頭が痛い」

「まあ、お粥でも食べて」

ゆつくりと口の中に運んでくれる。もしやりと食べていく。上手かった。

「あなたが作った料理です」

「そか」

「俺は苦笑を隠しながら立ち上がろうとした」

「今日は寝てください。そうだ、彼らは仕事が終わったから戻ってきましたよ」

― 水魔法 60 ―

二人だけが戻ってきた。

一人は木人についているのだろう。

そして、俺はやはり立ち上がるうとする。

「無理はしないでくださいといっているでしょうが」
「はい」

俺は小さくなっていた。

「一日で直る風邪ですから、明日になったら、本の運びをお願いします」

「そうですか、今ある本で何冊だ？」

「ウルクーダたちが集めた本で二万冊です。あなたの千冊を含めて、二万千冊です」

「うーむ足りないな」

「足りないですね、それでも開館を告げてもいいものかと思いますよ、さすがに、一銀貨は取りすぎだから、当初の予定どおり、一人一銅貨で、一回でたらまた入場料を払う仕組みにしようと思います、トイレは二階にも設置してありますし、あなたが言っていた。料理部屋もつくってあります。何もかもいたりつくせりです。しかし、開館は明後日ですね、明日中に準備が終わればですが」

「そうだな、そもそも、考えたら、結構な滅茶苦茶だったよな」

「滅茶苦茶があなたのいいところなのですよ」

「うーむほめ言葉に聞こえない」

「そうですか？」

「そうだよ」

「なら、何かいい作戦を練りましょうか？」

「いや考えなくて言い、できれば、その胸で暖めてくれ」

「それは出来ません、なぜなら、私は、ガードが固いからです」

「そうか、いつもの暴力突っ込みがこなくて安心したよ」

「さすがに私も病人に暴力はふりません、さきほどのお粥に毒薬をまぜることならしたかもしれません」

「何気に怖いことをいうもんだね、そしたら、俺は死んでしまうじゃないか」

「ビジネスパートナーを殺すほど私も落ちぶれちゃいません」

「ありがとな」

「こちらこそ」

「ところで、勇者はどうしてる？」

「心配しすぎて、あなたに人口呼吸しようとしたので、やめさせました」

「危なかったぜ」

「それはドツチの意味で？」

「いや気にしないでください」

「それなら、今日はよく眠ってください、本を読むのは明日まで禁止です」

「えええ」

「文句があるなら、読んで見ますか？　じー」

「こえーよ」

俺がにやりと笑うと彼女がふふふと笑った。

「そうですね、お休み」

ばちん、と音になって、暗闇に閉ざされた。ランプを消したようである。

そして、俺はゆっくりと眠った。意識が暗闇にどっぷりとつかっていくように、ついに、第二図書館が完成した。

9 第二図書館（後書き）

主人公たちが経営をする図書館が完成しました。これから彼らはどうやって商売するのでしょうか。拙い文章ですが努力して参ります。アドバイスがありましたらお願いします。

10 第二図書館オープン（前書き）

評価してくれた方本当にありがとうございます。とても嬉しかったです。これからもよろしくお願いします。

10 第二図書館オープン

朝の四時に目ざめた。だるい感じはなくなっている。体から活性力がみなぎる。まるで、力が湧き出るようである。俺は、さっそく、立ち上がった。その足で図書館に降りると、さっそく号令をかけた。

― 箒を使うレベル130 ―

― 料理レベル70 ―

― 勇者の技レベル15 ―

― 水魔法レベル70 ―

― 分身レベル7 ― になっている。

昨日で二体が戻ってきて、今日で四体が戻ってきた。みんな働いてくれただろう。

そして、今日は分身はまだ使わない、まずは、台所に戻って、料理のレシピを見る。そこには分厚い本があった。信じられないものでも見るように、ページをめくっていった。色々な料理があった。見たこともない料理もあった。これはいいだろう。

たぶん、勇者の技レベルがあがっていたのは、誰か、万引きしたのだろう、それで武力行使したのである。監視させといてよかった。

俺は、練習場の裏に向かった。そこで、みんなさっそく仕事を始めている。本を運んでいるのである。木人までいる。勇者も働いている。ブアンビーも働き、魔王までいる。

俺はこのパレードを眺めながら、ちよつと嘆息した。

みんなで、運ぼうと思った。

― 分身レベル7 ―

「全員、運び」

「『『『『『イエッサー』『』『』『』』』』』」

全員が叫んだ。俺たちは、本を運ぶために、みんなで協力して、二階にまで上っていった、並べた。二人を並べる係りにさせた。名前順に並べるために、沢山棚があるため、活用させてもらった。

まずは著者順に並べていく。俺も並べている、分身が運んでくる。ひたすら並べる。

開館を次げて、ブアンビーが受付に行ってしまった。ルーサーが登場した。無視しよう、ルーサーは本を積み上げて、おいてくれた。ちゃっかり、嫌がらせを忘れないように、紙にバカと書いてあった。腹立。

ということで、俺はひたすら並べている。終わることなき戦いである。だが、今日中に終わらせる必要がある。

本を棚にしまいながら、色々考える。こんなに沢山ある本、こんなに色々奏でくれる本、なんて素晴らしいんだ。そうだ、これはパラダイスだ。とか思っている。

「なんかいやらしい顔してるわよ」

魔王がちゃかした。

それに乗せられたのはなぜか、勇者であった。

「本当だ。この前ね、私の裸見たときもこんな顔してたよ」

「なんだと、真か」

「そうだよ」

もうやめてくれ、俺が悪かったから。

「こつ鼻の下のばすってやつ？」

「真か」

魔王、食いつきすぎ、勇者ローザは敵だろうが。

「そうか、男は裸に弱いのか」

「いやそんな情報必要ないからね」

「そうなのか？」

俺に上目遣いで確かめてくる。

「ささ、仕事仕事」

「ごまかすな、ホンポよ」

俺はごまかしながら、笑っていた。そんなもって、ひたすら、本を並べていった。夕方の六時に、ようやく仕事が終わった。朝飯、昼飯を食っていないので、死にそうである。

終わった。まだ本は増えるけど、今終わった。

「二万千冊、終わったぞ」

ウルクーダがやってきた。ルンダとカンダもやってくる。

「よし、お前ら、明日から、商売を始めるぞ」

「やった、ようやく、俺たちの商売だな」

ウルクーダが満開の笑みで微笑む。なんたる素晴らしい微笑みなのだろうか、分身を回収して、何も覚えていないことに腹を立てながら、俺は、一人分身をつくって、木人に向かわせた。木人はいいと、干からびそうになっていた。外に出させて、水を浴びてもらおう。

俺は、安心して、みんなに指示をてきばきと下す。

「いいか、明日、ここで働けるやつ手をあげる」

「俺大丈夫です」

「俺もです」

「私もです」

ウルクーダとルンダとカンダだけである。

「他は？」

他の傭兵は首をふった。どうやら、作家から小説を集める仕事があるらしい。

それで、俺は彼らにてきばきと下す。

「あ、私大丈夫だ」

「よし、勇者は、門番になってくれ、一人一銅貨受け取ったら通す役目だ」

「任せなさい、ちよろまかしていい？」

「ちよろまかしたら、ぶっ殺す」

「ふえええん」

「可愛く泣いたって駄目だ。銅貨はちゃんと箱に入れるように」
「はい」

「そして、ウルクーダは貸し出し担当だ。ルンダとカンダは料理のサポートを頼む」

「はい」

「よし、明日から勝負だぞ、今日、ブアンビー様が、宣伝してくれたそうだ」

俺がしみじみと語る。するとみんなは「と頭を下げている。

「感謝を忘れないように、あとで怖いことにならないために」

「そうですね、もちろん、兄貴が、ほめてあげるのが効果的かと」

「俺は怖いからできない」

「できないんじゃないかってするきがないのよ」

勇者、お黙り。

「私だったら、ホンポにほめられたら、人肌脱いじゃうけどな」

「脱がれたら、恐怖の祭りだ」

「そだね」

みんなで笑うのであった。

俺は、本を読もうかと思ったが、明日の楽しみのために集中できないと思って、分身で料理人をつくって、明日の仕込みをさせた。料理の材料は、一ヶ月に一度、仕入れがくる。昨日、着たのだが、ブアンビー様が、仕入れを大目にくれたようである。第二図書館の台所に沢山の食材が並んでいた。

俺は、息をすって、料理をつくる分身を眺めていた。どこにも問題は無い。ために味見してみたが、自分が作るより格段にうまかった。安心すると。

俺は部屋に戻った。事務所の二階である。

まだ時間があるので、小説を書くことにした。

『王様が魔物になつたら！！』という小説をひたすら書き続けた。

物語が弾む、――博士――を利用して、さらに書き綴る。終わりがないのか？ 終わりがあるのか？ 先が見えない。そして、前が見えたとき、冷静になった。十二時になっていた。今日の終わりである。

そして、俺は眠った。朝の四時に目ざめた。

第二図書館の台所では分身の料理人が料理していた。

俺は、事務所で料理をして、みんなの朝飯を用意した。今日は掃除抜きでも大丈夫だろう、なにせ、一日かかさずに掃除していたために、まるで綺麗になっている。

料理は、卵のサンドイッチをつくった。

みんな起き出した。勇者が頭をぼさぼさにし、ルーサーが寝巻き姿で、ウルクーダとルンダとカンダ、それと傭兵団のみなさん、ブアンビーもいる。昨日とまりこんだ。魔王までいる。みんなが揃って、朝飯を食べた。

そして、食器を洗って、朝の十時になるころに、二階の入り口で俺たちは整列していた。

最初のお客がやってきたとおもったら、沢山お客が着た。

みんなこっちにきて、大きな声で笑っていた。

そして俺たちは普通の図書館にはないことを叫ぶのである。

『いらっしやいませー』

これは、図書館というお店を始めた。男の話。

10 第二図書館オープン（後書き）

ついに図書館が開店しました。彼らはどうやって商売していくのか、見てあげてください。

1 図書館経営一日目

俺たちは、みんなうきうきしていた。そして、何よりも、お客の多さに唖然としていた。何千人というお客が第二図書館にやってきた。お客が向かったのは、俺が書いた。お勧め覧である。そこには、天界からもらった小説が書いてある。千冊しかないために、全冊が借りられ、読まれていた。俺はそんな光景を眺めながらのほほんとしていた。

子どもが読む、大人が読む、女性が読む、男性が読む、色んな人が読む、老人が読む。沢山の人が読む。まるで、これこそ図書館だ。思い描いた図書館がそこには広がっていた。何よりも生きている心地がしたのである。俺は、本を事務所から持ってきて、第二図書館のカウンターに広げて、書くことにした。やはり人がいて、みんながいて、それを眺めるのがいい、今日は分身は二体だけにしよう、一体は木人の水撒き、一体は料理、この二体である。

しばらくしたら、本格的に働こうと決めていた。
そして、俺は小説を書き続ける。終わりが無い未来がある。
それが、小説である。

「博士」を使つて、さらに集中する。時間が止まったような感覚したが、それは気のせいにかすぎない、冷静になって、空気をすえば、ちゃんと呼吸しているのである。

気持ちいい、これが、経営、そして、遊び、そして、仕事、こんなに気持ちいいことがあるんだろうか。

俺はもう思うが様に、小説を書きなぐり、完成させてしまった。

俺は、小説を見ながら、色々考えた。

この小説が何を示してくれるだろうか？

その時である。料理部屋から、悲鳴が聞こえた。

何事だとおもって、向かうと、ルンダがこけていた。もろに顔面にマヨネーズらしきものをかけられた女性が悲鳴をあげていたのである。

女性は怒り心頭に怒鳴った。

俺はそんな彼女に顔面から水魔法をぶちまけた。女性はなにが起きたか理解できなかったようである。この水魔法はコントロールがきくために、顔だけに集中させることはたやすい。女性は綺麗になった顔をさぐって、乾いた水をぬぐって、微笑んだ。

「あら、ありがとう」

といって、立ち去った。普通に考えたら、顔面に水をぶっかけられて、あらありがとうはないだろうと思うが、綺麗になったのだから、問題はないのだろう。

「すみません、兄貴」

ルンダが頭をさげて謝る。

「気にするな。もう失敗するなよ」
「はい」

俺は、とぼとぼと歩いていると。

「だから、さつき、お金渡したでしょ」

男性が怒鳴っていた。

勇者が笑っている。

「だって、一度出て行ったらまた払わないと」

「だから、トイレだって」

「トイレは二階にありますよ」

「つまってたんだよ」

それを聞いて頭が真っ暗になり、冷静になる。

「すみません、どうぞ通ってください」

「そうか、話がわかるじゃないか」

男性が通ると、勇者がこちらを見て、何か考えている。

「こういう場合は通らせてあげて、わかった？」

「分かりました」

勇者が微笑む。

俺は、トイレに向かって、水魔法でぶち当てると、流れたのであった。便器は水洗式になっていて、水を当てると流れる、なんらかの故障で水を流すところが、折れていた。それを直すと、元どおりになったので安心する。

俺は頭を悩ませながら、カウンターに戻ると、ウルクーダが苦

闘していた。

「えっと貸し出しは、二週間後までです、それを過ぎれば、延滞料金がかります、一回貸し出しするのに、二銅貨必要です」

それを説明する。そう一回貸し出しするのに二銅貨必要なのである。俺の世界ではレンタルショップとかがあったけど、これを参考にした。おばちゃんが考えている。

「でもお金取るのつてずるくない？」

「ここは、有料のところですので」

「そうよね、仕方ないわね」

ウルクーダに二銅貨を渡すおばちゃん、俺は安心した。

一回貸し出しに着た人にいちいち説明するのを何とかしないといけないから、俺は一回事務所に戻って、いらなくなった紙を集めてきた。それに書きなぐって、色んなところに貼った。

「一冊二週間貸し出しで、二銅貨、延滞料金は一週間後とに一銅貨アップ」

と書いたものをいたるところに張り巡らせた。あとは大丈夫だろう。ウルクーダーの元には長打の列が出来ていたために、俺も参加して、貸し出しをした。

メンバーズ登録は、いままで、ブアンビーの図書館で使っていた魔法の真名でなんとかなる。真名には、力があって、サインしてもらったものに、二週間が経つと光だすのである。そして、二週間以内に返せば、その真名を消せばいいのである。

分かりやすいシステムになっている。

このシステムは、ブアンビーの図書館で使われていたものを利用させてもらった。

サインノートは、分厚くあり、今までの人数だけでも数千は越えるだろうと思われた。

料理のところを見ると、テーブルでお茶を飲みながら、談笑している主婦たちがいた。

俺は安心して、カウンターに戻って、ただひたすら、ぼーっとして、ただただ、お客の流れを見つめていたのであった。

これが俺のお店、いや俺の図書館だ。

そして、夜中になったとき、閉館を次げた。残っている本は二万冊くらいである。天界の本はほとんどが借りられてしまった。今日中に天界の本を入手するしかないだろう、ある種の賭けであった。

そして、計算が始まる。ブアンビー様が見届けるなか、みんなで食事をしながら、収入を見守る。

銅貨を数え終わると、ブアンビーが微笑んだ。

「一万銅貨よがんばったわね」

「すげええええ」

ウルクーダがたまらず叫んだ。

「つまり、千銅貨で、十銀貨だから、百銀貨よ」
「おおおお」

勇者が驚いていた。

「それで、俺たちにも給料が出るんですか？」

「それは、今月が終わってからよ」

ブアンビー様が告げた。

「基本的に給料の相場は分かっているから、私が給料の値段を決めます、それをホンポが配る、それでいい？」

『はい』

全員が頷く。

「そして、俺の給料は？」

「もちろん、あるわよ、安心しなさい」

「よかったよ、まったく」

夕食を食べた後、俺は第二図書館に向かった。『王様が魔物になったら！！』を異界と天界に展覧会に出したのである。さつそく返事が返ってきた。真名の呟きなどは省略せずにやっているが、ここでは記さない。

―リンドパークさんが購入しました 天界本二千冊です。

―ウィツシュロールさんが購入しました。異界本五万冊です。

―シシオドシさんが購入しました。天界本三千冊です。

俺はぶつたまげた。これのどこにこんな素晴らしいものがあるのだろうか？

何が素晴らしいのかは分からない、だが、分かること、俺の小説は天界にお気に召されている。今は天界が必要である。

―オークションをしますか？
―イエス

その後はいつもどおりに、オークションが始まった。

それから二十分後に決まった。

―リンドパークさんが合計一万冊出します。
―ウィツシュロールさんが二十万冊出します。
―シシオドシさんが九千冊出します。

俺は早速決めた。

―リンドパークさんが落札しました。本を出す場所に移動してください。

俺は、うすぼんやりする、本を眺めながら、イエスの覧に手で押した。

そして、向こうから、本がやってくる、その時である、向こうにいる黒い羽をした男性の天使が微笑んだ。

「君は専属契約を結ばないか？」

「専属？」

「君が一ヶ月に一冊出す。こちらは、質のいいやつを、十冊ずつ出そう、もちろん、君のほうは、質のいいやつに限るよ？」

「分かりました、結びましょう」

「では、今後ごひいきに」

「はい」

―専属契約を結びました。これから、本を出すときは展覧会に出す

か、専属側に出すかを決めてください。

脳内の説明が告げた。

俺は一安心して、大量に出てくる本を眺めた。

俺は思ったんだけど、天界の人って、本を出し惜しみするはずだよな？

俺の小説にどんな魅力があるのか分からないけど、出し惜しみる気配すら感じない。そういえば、添削は自分でやった。ブアンビ―様にはやつてもらってない、これで、苦情きたら、最悪だけど、そのときは甘じて受けよう。

俺は、とぼとぼと歩きながら、思った。これが専属契約か。

本をひたすら並べるのに分身を使っただけは言うまでもなかった。

第二図書館の中で、ひっそりと数名で並べる人影があった。

1 図書館経営一日目（後書き）

図書館に色々なクレームがやって来ます。アドバイスあればバシバシお願いします。

2 小説家レベルがありえないことに！（前書き）

ついにすごい力が、でも一番表現しにくいかも。

2 小説家レベルがありえないことに！

―分身レベル7―を使用した。

俺の言葉に、不思議な感覚が宿る。

それは、軍隊ではなく、一つの部隊として。

俺は単純にそこに存在していた。

「イエッサー、ナンバーワン、掃除をする。第二図書館」

「イエッサー、ナンバーツ、掃除をする。第一図書館」

「イエッサー、ナンバースリー、木人に水撒きをする」

「イエッサー、ナンバーフォー、料理を作る」

「イエッサー、ナンバーファイブ、本棚の整理をする」

「イエッサー、ナンバーシックス、小説を書く」

「イエッサー、ナンバーセブン、見張り」

「きばっていい」

「オウオウ、イエッサ」

そして、俺たちの図書館ライフが始まりを告げた。俺は、カウンターでただひたすら本を読んでいた。最近分かったこと、分身のほ
うが質のよいものを作れるということである。

だから、小説を書かせることにした。なにせ、専属契約を結んでいるからね。

そして、俺はというと、ブアンビー様から一日三冊まで読んでいい許可が下りたのである。

だから、俺は喜び、小説を読みまくろうと思っていた。

本棚から二冊を取り出し、一冊はブアンビー様から読みなさいというものであった。俺はただページをめくった。一冊目は『小説の書き方』であった。基本的は小説の書き方なのだが、何かが足りない、そう、主人公である。

主人公がいけない説明形式の小説になっている。これは説明書みたいなやつだろう。

―小説家レベル9999―

一回、俺は空を見て、地面を見た。そして、あははと笑った。

「なんじゃこりゃあああ」

ちなみに、今は朝の四時です。誰もいません、俺の叫びはむなしく慟哭になってしまった。

そして、俺は頭をかきながら、とんでもないレベルを確かめるのであった。

どういうことだ？ 俺が小説を書いて、天界があんなに争ったのって、これが理由じゃないか？ ということはもともと、レベルが高かったということか？ だから、覚えても、レベルは上がらなかった？

なるほどな冷静に考えればそうだ。だが、もっとシンプルに考える、俺の心は狭いのである。そして小さいからチビのままこの世界に登場した。そもそも―大きくなる―が無ければ、大きくなっていないのかもしれない。

それが、リアルの話である。
ということとは？

俺にはまだ隠された能力があるということか？

小さいのが、もしかしたら、潜在能力だとしたら？

だから、俺は、次の本を捲った。

『録音機の仕方』

なんだか、意味がわからないが、録音機になったつもりで、主人公を語っている。

俺はそれに並んでいる主人公である。

それを読み終わると。

――発音レベル――

なんか覚えぞ、ために、口笛を吹いたら、ふけた。俺の世界の名曲を口ずさんでみたら、それもすんなりと呟けた。驚いた。俺の唇は口笛なんて出来ない唇だとおもっていたのである。だから、わくわくした。

そして、俺はというと、次の本を捲った。それも面白そうだからである。

『サラリーマン』

ほほう、俺に言わせれば、毛の生えたような小説だな、俺にサラリーマンを語れ？ 無茶いな、俺は、サラリーマンを熟知して、すぐに首になった男だぜ？ 営業？ 妨害？

なぜか、一言で、営業妨害になるのであった。

まあ、ほどほどにな。

―接客レベル25000―

ちよまで、これ、何かの間違いだろ、俺の頭はおかしいのか、どこかに吹っ飛んだのか？ 冷静になれ、これはどういうことだ。俺はそんなに接客は上手くないぞ、もしかしたらこれから上手くなるのか？

元サラリーマンだからなのか？ 色々と考えたが、ジレンマのごとく繰り返された。

どこがどこが？

俺は冷静になりながらも、ようやく気付いた。

つまりそういうことなのだ。俺がリアルで経験したことは、こちらの世界ではとんでもないことになる。

―交渉レベル5―とは違うようである。接客だからね、どうやら9999レベルが上限ではないらしい。それに驚きつつも、今日の収穫はあった。そして、開店を次げたのであった。ルンダとカンダは今日は欠席である。ウルクーダが相変わらず、受付をやっている。そして、勇者は門番、魔王は、料理のサポートである。

今日は、ルーサーが分身にきてきぱきと指示を下している。釈なことに、ルーサーが援護にやってきたのである。

分身は本棚に並べるのに四苦八苦していた。

俺は、空を見上げて、微笑んだ。これが、楽しい毎日子、それがあるから毎日があるのさ、だから、なんだろうね。

「るるるん、俺の毎日は、そんなに下克上か？俺は楽しいことをしているのさ、なぜかって？楽しいからさ」

るるるんと呟いていると、

いきなり回りに拍手喝采がやってきた。俺はとぼけていると、周りが、ふんふんと唸りだした。何事だ。

俺はただひたすら口笛を吹いた。お客からは大絶賛であった。なぜか、名産になってしまったのであった。そして、俺は、事務所に戻ると、猛スピードで書いている、小説家がいた。さすがレベル9999である。そして、俺はというと、そういえば、最近はみんな朝飯を食っていない、忙しいからである。たまには考えないとな。俺は、とぼとぼと事務所の台所に向かって、クッキーを作ることにしたのであった。まだまだ今日は続く。

なんつったって、接客と小説家レベルがとんでもないのだからな、みんなにアピールしないと！

2 小説家レベルがありえないことに！（後書き）

小説家レベル9999と接客レベル25000を活用して面白い小説を書こうと思っております。

3 分身に小説を書かせること、すなわち奴隷なり

クッキーをみんなに振舞った結果、お前、何さまだよという視線に堪えられなくて、カウンターに隠れたのであった。

最低だぜ、部下たちよ！ いや仲間たちよ！

俺は、事務所に戻って、クッキーの後片付けをしながら、小説を書いている分身をちらりと見つめた。彼は純真に真っ向から立ち向かっている。気迫がすごいのである。

リングをはつと言って割るような感じ、そんな感じなのだ。

例えば、バナナがあつたら、はつと言って、バナナを握りつぶす。そりゃ普通か、なら、やはり蜜柑だ。はつと言って、ぐちよりとなる感じ、あんな感じだ。

ぐちよりとした視線で俺を見てくる分身である。

「君はなんて最低な人間なんだろうか？」

「最低って、お前たちのご主人だろ？」

初めて分身から非難を言われた。

「そういう答えじゃなくて、もっとこうしかってください、マゾではありません、アイディアがほしいのです」

「ほほう、なるほどな、こんのド畜生が、そこまで言ってもわからないのか、駄目だな、終わりの見える先を探せ、お前に終わりがあればな」

「なるほど、終わりがあればだな？　かもらいました」

「もらうのかい」

「はい」

分身が書きこきしている。恐ろしいスピードである。なんか本が積み重なって椅子になってたから、そこに座ってみる、なんだか暖かい。

まさか。

俺はページを捲った。

そこには、無数の物語たちが存在していた。それも無限大に広がる物語、俺はぱくぱくと口をあけた。その字は自分の字だったのである。

「お前やったのか？　すごいな」

「それ全部、書きましたよ、これからですよ」

「何冊ある？」

「二百冊です」

「お前は機械か！」

「それもらいました」

「もらわんでええ」

俺は頭を抱えた。こいつは危険だ。たぶん俺より才能あるぞ、それも消さなくちゃならない、分身を消す原理だから、しかし、いやその才能は俺にあるのだから、いいだろう、俺に戻ってくる？　違う、分身だから増やしているのだろう。そう考えると、頭の中に冷静な部分が微笑みかけてくる。

もっと分身レベルをあげて、小説を書かせよう、そしたら、俺は、金の亡者になれる。

亡き者になつたら意味ないけどね。

俺は、とぼとぼと事務所から出て行くと、第二図書館で大乱闘が起きていた。

俺は、そこに向かった。

おばちゃんがおばちゃんに包丁を向けていた。そして、おばちゃんがルーサーに叫んだ。最初のおばちゃんがルーサーであります。ルーサーが喚き返す。

包丁を握っている、おばちゃんが、転んだ。みんなで、叩きのめそうとするが、みんなはやしたてる。どういうことだ？

「いいですか、あの本棚はエロ本しかない孫に見せたらとんでもないことになるじゃないか」

「おばちゃん、それは官能小説ですよ」

ルーサーが説明する。それで、包丁を振り回すおばちゃんはどうかしてると思いながら。

俺はとぼとぼと歩き、会釈した。

「ごめんなさい、館長さん」

「へ？」

「わたしや、悪くないんです。すべて、天とうさんが悪いんです。わたしや悪くない、申し訳ありませんでした、わたしや、これから、いえに帰ります」

「いやいや、俺会釈しただけだから」

「それだけでありがたいです。なんたる天寿、なんたる、褒美だろ

うことが」

ためしに、他の客に会釈してみた。
するとみんなキラキラした。微笑みを向けてくる。

つまりこういうことであろう。

「接客レベル25000」は、会釈するだけで、問題ごとを解決してしまう力なのである。すげーなおい、これなら、図書館で悩みな
いぞ。だが、それは甘かった。

「おい、てめー、またトイレつまってるぞ」

それは、いつの日か着たお客さんである。

「すみません」

「わかりやいいんだよ」

「それで、今、流すので、ご一緒にませんか？　その後にトイレに
入ればよろしいかと」

「わかってるじゃねーか」

会釈は通用しないが、問題を解決すると解消されるみたいである。

俺はその後、水を流した。お客がトイレに入っていくのを見届け
て、外に出ると。

包丁を持っているおばちゃんが、立ち去っていった。なんだか寂
しそうな背中であった。

俺は、とぼとぼとカウンターに戻ると、餓鬼たちが集まってきた。

みんなで、俺に目を向ける。

「兄ちゃんさ、小説家っちゅうのか？」

「そうだけど？」

「サインくれ、俺見たぜ、あの平和とはってやつ」

「ありがとうな」

俺は、餓鬼たちの出した紙にホンポと書いたのであった。餓鬼たちは喜び勇んで立ち去った。俺は本当にうれしかった。俺を支えるのはファンです。

俺は、少し眠ろうとした、そろそろ昼寝の時間だな、そんな時間は決めてなかったけど。

いきなり、罵声が聞こえた。

そして目を覚ますと、山賊らしき男が二十名くらいいた。みんなそれぞれ武器を握っている。そんでもって、その後ろには魔法騎士がいた。

魔法騎士を率いるのはジンである。ジンはしょぼしょぼした目で叫んだ。

「オウカーロン様がお前に話がある」

「山賊じゃねーのか？」

「オウカーロン様は、サラルスレット国の大使であらせられる」

「ジン、もうちょっとカクゼツはつきりしろ」

「オウカーロン様は、サラルスレット国の大使であられる。彼らは、ここに来て、ある本を探しているという。その本を見つけることは

可能か？ と聞いている」

「おい、山賊、てめーで話せ」

「オウカーロン様は、下民に言葉を発さないそうである」

「てめー、なめてんのか」

俺は立ち上がった。もちろん箒といらなくなった本を片手に。

「オウカーロン様はこうおっしゃられている。武術で負かせてみよ、そしたら、話してやろう、そうです」

「いいだろう」

俺は、箒と本を持って、歩く、みんなでわいわいしながら、俺たちは外に出た。一階の図書館を通るときブアンビーがすごい目つきであつたけど気にしない。

「オウカーロン様はこうおっしゃられている、お前は俺を舐めているのか？ 本と箒で？」

「なめてない、俺はこれの武術がすごい」

「オウカーロン様は聞いたことが無いといっている」

「我流だぜ」

「オウカーロン様は」

「うるせい、かかってこい」

オウカーロンが背中からシミターみたいなものを二本取り出した。そして、向かい合う。俺とオウカーロンが視線で語り合う。

わーってるって、
なにがじゃ。

わーってるって、
なにがじゃ。

何も語れません、こいつなにがじゃしか脳内で言葉を発さないのか？

俺は一步進んだ。

オウカーロンが一步進む。そして、オウカーロンの眼にも見えないシミターの腕裁きが発揮される。このとき、何もかもがスローに見えた。感覚が研ぎ澄まされる。

―博士―を利用して、時間を二倍に遅くする。そして、―軽業師―でもって、体を宙に飛ばす。

体が浮くと、箒を振り落とす。手を離れた。久々に使う。―指揮者になる―で、指揮棒のように動かし、相手の顔面になぐりかかる。だが、オウカーロンはそれをさも当然とばかりに避ける。

俺は―ワープ魔法―を使うと、オウカーロンの背後に回った。そして、本を構えて、―勇者の技レベル15―を利用して、本を叩き落す。だが、終わらなかった。

オウカーロンは背後を振り返った。まるで気配を感じているように、シミターが踊りかかる。それも予測ずみだぜ。

―透明化―を使う。

オウカーロンが目をしばたたかせて、目をつぶった。どうやら、こいつは気配で感じるようだ。シミターを避けると。―本レベル100―を使って、さらに横から殴り落とす。

それも避けられる。こりやたまげた。こいつは只者ではない。

二人は交差して、ふんと落ちた。だが、それがそもその間違いであった。オウカーロンの気配では、彼は確かに地面に落ちたのである。

だが、地面に落ちる音は聞こえなかった。

――翼化――を使用して、宙回転して、頭上から、振り落とす。オウカーロンの顔面に直撃して、オウカーロンがド派手に地面に叩き落された。山賊たちが悲鳴をあげる。

それが、オウカーロンとの出会いであった。

3 分身に小説を書かせること、すなわち奴隷なり（後書き）

接客レベル25000恐るべし、どんどん面白くしていきます。ここまで読んでいる読者に感謝です。

4 伝説の本（前書き）

評価だけでもくれると嬉しいです。お待ちしております。お気に入りに登録してくれた方ありがとうございます。

4 伝説の本

なぜか、オウカーロンが土下座していた。そして、俺は微笑みながら、語りだす。

「いいですか、図書館では武器は禁止、どうしてもというなら、篇を貸します」

「かたじけない」

「ですけど、あなたたちは、兵士なのでしょう、特別です」

「ありがとうございます」

「さて、本題です。オウカーロン、とにかく何が望みだ」

「こやつ、わしを呼び捨てか？」

「図書館に身分はありません、そもそも、あなたは、この国の国王と話をし、こちらに着たのでしょうか？」

「そうじゃ」

「なら、ここが、あの国の専属ではなく、中立だとも知っているはずですが？」

「そうなのじゃ」

「そしたら、話が早い、俺は、こう語ります、あなたの目的を語りなさいと」

しばらくオウカーロンがうなだれていた。そして唐突に語る。

「わが国が奴隷制度なのは知っておろうな」

「知っていますよ」

サラルスレット国、そこは奴隷制度である、行ったことないけど。

「そして、奴隷たちに本を与えることになったわけなのだが、奴隷

のヒーロー物を探している」

「すごい着ましたね」

「それで、『奴隷と踊り子』という伝説の本を探している、天界にある本だそうじゃ」

「なるほど、探してみますよ、頼む、その本で奴隷たちに夢を与えるんじゃ」

「分かりました」

「一週間後にまた、来る。見つけてくれたら、褒美を出す」

「はい、任せてくださいな、無くても、天界から交換できるかもしれないですね」

「真か、ありがたい」

ジンがやってきた。

「ありがとうな、助かったぜ」

「いんや、お互い様だ」

「じゃあな」

「ああ」

そして、彼らは立ち去った。俺はカウンターで肘を付きながら、考える。奴隷と踊り子、そんな本あったらどうか？

ルーサーと分身一名を呼んだ。

「奴隷と踊り子という本を探してくれ、見つからなかったら報告を頼む」

「わかったわよ、この生意気なやつめ」

「了解しました」

そして、俺は、ただ。みなさんを眺めて、問題が生じたら解決しての数時間を送った。夕食は、分身が作ってくれた。みんなで、わいわいしながら、食べる。

勇者が笑う。

「それにしても、門番するだけで、お金が集まってくる夢みたいだ」
「お前の金じゃねーけどな」

「そうじゃな、ちよっとちよろまかそうかな？」

「ばれたら殺す」

「ひいひい、怖いぞ、ブアンビー様」

「私も同意権よ」

「なんたることか」

ここには魔王はいない、魔王は自分の家に帰った。たまにやってきては、手伝って、かえることを繰り返している。

木人は桶にはいったまま、木のように立ちすくんでいる。

一方で、ルンダとカンダはもしかやもしかやと食べている、夕食は手羽割きである。鶏の小さな羽根が上手かった。ウルクーダが神妙に頷いている。

ブアンビー様は黙々と食べている、そこには普通の出来事があった。数名の傭兵団がうめーと囁いている。

そして、俺は、食事を終わると、分身の回収を始めた。全員が戻ってくる。まずは一人ずつ回収していく。そして、全員が納まったところで、レベルアップの確認である。

― 箒を使うレベル150 ―

― 水魔法レベル80 ―

― 料理レベル80 ―

― 小説家レベル10000 ―

―分身レベル8―

以上である。

ふうと息をすって、まずは、本をばらりと捲る、速読で、誤字脱字がないかを確認していく、どうやら速読だと能力が覚えられないようである。俺は二百冊を二時間かけて読み終えると、ため息をついた。俺が書くより格段に面白かった。そして、ブアンビー様の部屋へと向かった。二百冊を抱えながら、ブアンビー様の扉を開いた。案の定、本がうごめいていたが気にせず。告げる。

「あのう、天界から、本を選んで送ってもらうにはどうすればいいんですか？」

すると、ブアンビー様は、下着一枚でこちらを見ていた。胸にはピンク色の物体が見える。

「きやああああああ」

というわけで、俺は叩きのめされた。ついに見たぞ、あれが、美乳だ。あれが、でか乳だ。見たかったものが見れた。おお、幸せだ。なんたる光栄か鼻血が止まらない。ぞくぞくでてくる。本に掛からないように気をつける。

「入って」

彼女の顔が真っ赤である、そりやもうでかかったからね。

生尻は見えなかったけど、胸はばっちり。

「では、方法を教える前に、あなたを殺します」

「ちよまて」

「なんで？ 私の着替えを見たくせに、殺したいは、ああ、あなたを殺したい、なんでノックをしないの？ ぶっ殺していいかしら？」

「いや、小説を書いていると思って」

「何がよ、一発なぐらせろやああ」

というわけで、一発殴られた。体が宙を浮く、そして、二発め、なんだコンボか、腹にくる。次に顎、次に顔面、次に足、色んなところを強打され、空中を舞って、壁に頭から突っ込んだのであった。壁は丈夫で、はじかれた。

「ありがとうございます」

「いいわ、それで、方法は、オークションをするときに、一枚の紙をその場所に置くの、ほしい本の名前ね、あとは検索をかけてくれるから、それで、相手の条件にそって、本を出すのよ」

「なるほど、ここでやってもいいですか？」

「いいわよ、その二百冊どうしたの？」

「いやー、書きちゃいましたよ」

「すごいわね」

「すごいもなんも、これ全部良質ですよ」

「へえ」

ブアンビー様が変な目で見ている。ただどあの美乳が見ればもう満足、グッド。

紙をもらって、書き綴った。奴隷と踊り子である。

そして、さわりながら真名を呟くと。

「出山本保 奴隷と踊り子の本を検索にかける」

すると向こう側にと紙が向かった。見えない空間にはいるように、
そういえば報告が遅れたが、ルーサーと分身が探したけど、その本
は見つからなかった。

しばらくして。

― 検索に掛かりました。交渉しますか？
― イエス。

すると、目の前に老練な男が出てきた。白い翼を生やしている。

「なるほどな、奴隷と踊り子の本がほしいのか、それなら、お前の
本を見せてみる、どんな本がある？」

「こういった本です」

一冊ずつ、ぱらりとめくって、あらすじを見せる。二百冊を全部
見せ終わると、その男は唸った。

「どれも一品もの、全部ほしいが、それでは相場が合わない、十冊
で交換しよう」

「はい、お願いします」

そして、彼が十冊を選び、それを向こうに突き出すと、こちらに
奴隷と踊り子の本がやってきた。

そして、俺は、安堵の息をすって、会釈した、会話を終了したの
であった。

次に、専属契約の人に結ぶと、つながった。

「やあ」

「リンドパークさん、一冊ありますので、十冊お願いします」
「いいだろう」

そして、一冊選んで、あらすじを見せると、唸った。

「素晴らしい、もらおう」

「ありがとうございます」

そして、ブアンビー様に別れを告げて、第二図書館に向かった。
俺は、本を贈ると、あっという間に、説明がやってきて、イエスを
言って、そして、こちらに本がやってきた。

それを本棚に整理すると、次に、リンドパークさんと別れを告げ
た。今月のノルマはクリアした。

ということで、オークションタイム。

俺はにやりと微笑んだ。

残り１８９冊でどれくらい稼げるだろうか？ 一気に全部の本を押
すと、その上に掌を乗せて。

「出山本保 展覧会開始」

すると、全冊の展覧会が開始され、あっという間に人々が群れて
きた。

購入は省くと、さっそく、オークションを選んだ。

― 神様が落札しました。おめでとうございます。

すると、目の前に現れた男性に驚愕した。

髭は長くて、眉毛が薄い、全身が光輝いており、頭はつるつぱげである。ブツダと呼んでもいいかもしれない。

彼がにやりと笑った。

「ええ、本だな、さて、神本を授ける、これはすごい本だからな、人々を簡単に魅了する。さて、交換しよう」

「はい」

俺は、本を押し出した。五百冊が現れた。そして、通信が切れた。

俺は、神本を置くスペースを奥のほうにしておいた。

そして、奴隷と踊り子を、カウンターの机の中にしまった。

俺はため息をついて、笑った。すごい本を手に入れたしまった。速く見てみたい。

さぞや楽しいのだろうな。
わくわくするな。

俺は笑っていた。

4 伝説の本（後書き）

神様が登場しちゃいました。バシバシコミカルにするので見てやってください。

5 時間を守らない大使（前書き）

なんか図書館経営物語になってますがバトルもあるので楽しみにしてくれると嬉しいです。評価くれた方ありがとうございます。感動しました。お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。

5 時間を守らない大使

朝目ざめると、やはり気分が良かった。四時に起きるなり、ごうんごうんと音が響いていた。耳に残る心地よい音である。

俺は、さっそく分身を作った。

もうめんどくさいから、略す。

掃除 2 名

料理 1 名

見張り 1 名

小説書く 2 名

本棚整理 1 名。

木人の水遣り 1 名

合計で 8 名であった。

俺は、第二図書館で本を読もうとしたとき、いきなり、ドアがどんと乱れうった。一階から聞こえる。俺はそこに向かって、扉を開けた。そこにはオウカーローン一味がいた。

俺は頭を抱えた。

「まあ、そろそろ出来たとおもってな」

「出来たって、まだ一日しかたってませんよ?」

「待ちきれんのじゃ」

「分かりましたよ、ありますから、二階にまで来てください」

そうして、俺は、第二図書館のカウンターの机から一冊の本を取り出した。彼はそれを掴み、微笑んだ。何度も頭を下げた。

「ありがとっ、これで、奴隷に夢を与えられる。本物のようだ」

「本物ですよ、それで、もう帰るんですか？」

「そうじゃな、お主の本を一冊ほしい、いくらで売ってくれるか？」

「今は持ち合わせがないですよ」

「そうか、なら、平和とはだけでもほしいのだが」

「いいでしょう、ちよつとお待ちください」

俺は立ち上がって、本棚から二冊取り出すと、――六次元の空間――を利用して、ベルトコンベアーを使い、コピーを果たした。そして、取り出すと、本棚にしまつて、次に、オウカーロンに渡した。

「ただでいいですよ、またきてください、次は図書館でゆつくり本を読んでくださいよ」

「かたじけない、だが、一金貨はあげよう」

「そうですか？　ありがとうございます」

金貨を請けとった。オウカーロンは、微笑んで、立ち去ったのであった。その一味も一緒であった。本当に時間を守らない人だなと思った。もしかだ交換しなかったら、怒ったのだろうか？

そんなことを思っていた。

しばらくするとオウカーロンが戻ってきた。

「お前、何しにきた」

「いや褒美を忘れていた。この箒を授けよう、ちよつど持っていたのでな」

「なんですか、その箒」

「天使の箒じゃ、魔法がこめられている」

「ほう」

「それと、何も書かれていない、怪物の書も授けよう、これは、武器として使われていたそうだ」

「なるほど」

「これで、いいか？ 褒美は、このオウカーロン、褒美を授けないと聞かれたら、王様に殺されるところであった」

「そうですか」

その一冊と箒を受け取って、俺は微笑んだのであった。オウカーロンが今度こそ立ち去った。一応、外まで送った。彼等が森の中に消えるのを眺めて、一安心した。よし、神本を見よう。楽しみにしていたのである。

俺は第二図書館に向かって、神本を三冊取り出した。

どれも楽しそうである。

どれどれ。『天界のさばき』

それを眺めながら、神様たちの裁きかたが分かった。雷を落とすことである。魔王もやっていたっけな。俺はほのぼのとしていた。

――雷を落とす――

え？ どゆこと？ 変な能力が身についたぞ。

ためしに、俺は、まだ朝ということなのに、外に出て、手を掲げてみた。

雷を落とした。目前の木が丸こげになったのは言うまでもなかった。

冷や汗をかきながら、図書館に戻って、まあ、見なかったことにして、次の本を見ることにした。なんだろうな。

『神武術』

なんか、変なおっさんが、神の武道家になってた。それを眺めて身についたのは。

―神業―

ふむ、どんな技だろうか？

俺はまた外に出た。木を見て、使ってみた。

はっと叫んで、拳一発で木を玉砕した。粉々である。

また。見なかったことにした。木人の仲間を二体も殺したことに罪悪感を抱くのは当然のことながら、致し方ない。そして、俺は最後の一冊を読みふけた。

これは面白かった。物語である。

『魂の抜け殻』

―死んで蘇る―

なんじゃこりゃあああ、いくらんでも、死んで蘇るって、どんな能力だよ、ためにやってみた。そしたら意識が暗くなった。いきなり目前に橋が見えた。天界に続いているようである。下には体がある。口から糸が出ている。俺は浮遊しながら、ために泳いでみた。ふわりと動ける。どうやら二メートル範囲しか動けないみたいだ。そして、俺はからだに戻った。

すげー怖い。

たぶん、死んだふりに活用できるだろう、どんな場面で使うかは知らないけどな。

しかも天界の道が見えたし。恐ろしい。

そして、俺は、本を返すと。さっそくだが、分身のところに向かった。料理の仕込みを終えている。次に事務所に戻って、色々と、本を書いている分身を眺めた。必至に考えているようだ。次に第一図書館に向かった。掃除している彼を見て、次に、第二図書館で見て、俺は、一安心して、カウンターで寝ることにした。最近やることがなくなってきました。

しばらくすると、開館を注げた。勇者が門番をやって、料理のサポートは、ルンダとカンダである。彼等が仕入れた本も昨日並べたし、傭兵団が集めた本も仕入れた。受付は相変わらずウルクーダである。そろそろ、誰か雇わないといけないかもしれない。トイレ掃除とかも頼める人を探さないと、よっこらせと立ち上がると、屈伸して、欠伸した。

空気を吸って、事務所に戻った。紙にトイレ掃除と受付募集と書いた。

募集要員は十歳から無制限と書いておいて。五枚くらい用意して、図書館のいたるところに張り巡らせた。

終わってしまったらやることがないので、天使の箒で掃除を始めた。分身の掃除を応援した。

掃除が終わると、次に、床ふきを始めた。木材の床はみしりと音をならした。

カウンターに戻って、転寝をしようとしたら、さっそく、募集要員が着たようである。

「すみません、募集って書いてあったので」

そこには、背の高い女性がいた。それも二メートルはあろうかと

いう巨大さである。ローブをまとっている。彼女はこちらを伺っている。

「どんな仕事をしたい？」

「はい、トイレ掃除です。これでも魔法使いです」

「ほう」

「魔法でトイレを掃除します」

「日給、どのくらいほしい？」

「できれば、五十銅貨で」

「よしついてこい」

俺はトイレに向かった。

「掃除してみる」

「はい」

彼女はポケットから雑巾を取り出すと、魔法をかけた。勝つてに掃除が始まった。彼女は指揮棒で操作している。俺も覚えているが、これは魔法だったのが、――指揮者になる――に似ている。

天上まで掃除して、終わった後に、彼女が微笑んでいた。

「よし、合格だ」

「はい、名前は、リンチャースです。リンと呼んでください」

「よし、リン、今日から働けるか？」

「もちろんです」

「よし、願います。掃除が終わったら、本を読んでくれて構わない、お客さんが、トイレ詰まったといったら、対応をお願いします」
「任せてください」

ローブに隠れて見えないが、色白の肌がつつすらと手首とかで見えた。本当に魔法使いのようである。

それから、カウンターに戻る前に、募集要員を消した。あと一人である。

俺はカウンターでお客を監視していると。いきなり、老人が現れた。老人は杖を握りながらこちらを見ている。

「あのう、募集を見たのですが」

「はい、受付ですね？」

「そうですよ」

「よしきてください、一日、希望額はありますか？」

「わしは、そんなに金がほしくないのです、二十銅貨でいいですよ」

「助かります」

「お互い様じゃ」

そして、ウルクーダと交代させて、五分間見守った。彼はとんでもないスピードで、受付を終えていた。どうやら、その道のプロのようである。

ウルクーダに戻すと。

「わしはな、執事をやっておったが、ごらんのとおり足が悪くて、首になったのじゃ」

「はい」

「だから、仕事を探していた。こつ見えても、孫に、プレゼントくらいたりたいのでな」

「俺も将来そうになったらそう思うでしょうね」

「名前は、フィナルだよ、フィンと呼んでくれ」

「はい」

黒スーツのような、タキシードを身につけている老人が微笑んだ。

「じゃあ、ウルクーダと交代してください、ウルクーダーにこちらに来るように言ってくれますか？」

「任せろ」

そして、ウルクーダがこっちに着た。

「ウルクーダーには、裏方の仕事を頼みたい」

「ということですか？」

「傭兵たちが集めてきた小説を、本棚に並べてほしい、最近、傭兵たちの集めるスピードが上がっている。一日に五百冊くらい集めるほどだ」

「知ってます」

「だが、彼らは運ぶことはできない、次の仕事があるから、だからお前に頼みたい、閉館してから並べては、次の本を待っているお客様に失礼だろう？」

「それももつともです」

「頼んだぞ」

「任せてください」

俺は一安心して、立ち上がった。次の仕事は何をしようか？

5 時間を守らない大使（後書き）

これからどんぶふくれていくので、拙い文章ですがよろしく願
いします。

6 分身ネタギレ

俺は、事務所に戻って、昼飯を食べようとしていた。みんな必要ないそうである。パンをもってきてひと齧りすると、二人の分身が炎を上げていた。目から火花が散っている。見ると、一冊も本が出てきていなかった。俺は不思議に思ったのだが。いきなり、分身一人が立ち上がった。

「駄目だ。取材しないと分からない」

「こつちも分からない」

「どうした？」

「「ブアンビー様のパンツは何色だ！！！」」

「お前らとんでもないことで悩んでるな」

「「違う」「」

「なら、なんだ？」

「「だから、この世界について知らないことばかりで、どうすればいいか考えていた。もつと世界を知らないと、いい小説は書けない、もつとリアリティーに書きたい、魔王の領地に入ってみたい」」

「なるほどな、それいいかもしれんな、俺もいくよ」

「「よし、出発だ」」

「まあ、さて、今日、魔王は着てたな」

「やあやあ元気かい諸君」

なぜかちょうどいいタイミングで魔王がやってきた。こちらを見てにやりと笑う。

「どうしたんだい、男三人揃って、いやらしい」

「そう言う問題じゃない」

「「ブアンビー様のパンツは何色だ」」

「お前ら黙れ」

「確か桃色よ」

「「うおおおおおおおお」」

「お前ら変態か」

ということで、一発殴っておきました。

次に、魔王にたずねる。

「おい、お前の領地を見せてくれ、こいつらアイディア枯渇したって」

「いいけど、どうして？」

「小説を書くんだよ」

「なるほどな、よし、ついてこい」

「あ、俺も行くから」

「そうか」

魔王が残念がった。

「さすがにおんなじ顔の男が三人も歩いているとびつくらこくぞ」

「まあ、魔王ジョークでなんとかしてくれ」

「じゃあ、そうしよう」

「ちよつとまで、みんなに連絡してくる」

それから、十五分かけてそれぞれに事情を説明した。ブアンビーだけが、嫌な顔せずにはいどうぞと言ってくれた。うれしい、あいつら、パンツが何色だっっていいたろうが。

俺はそんなことを思いながら、魔王につれられて、奥深い森の中を歩いていた。

「ここが、地獄の沼だ。やあ、スカルヘッド君」

ゾンビが歩いていた。こちらを見て、にやりと笑った。

「彼は、スカルヘッドになりたくって、死んだゾンビだ」

「ややこしいわ」

俺が当たり前に突っ込むと、スカルヘッドは沼に飲み込まれた。地獄の沼を通り過ぎると、大きな塔が二本あった。その塔の上に一体ずつ化物が座っていた。

「彼らは、シーザーウーマンだ。シーザーという生き物らしいが、その女性版人間版と考えてくれ」

「どこまで根掘り葉掘りするつもりだ」

俺が突っ込むと魔王が微笑んだ。

「こいつらは、流れ星をつくると喜ぶ」

彼女はノートに流れ星が流れたと書いた。そしたら、星が瞬いた。何百の星が流れた。お前のせいで、星が滅んだら、お前は本物の魔王だ。

心の中で突っ込んでおく。

二人の分身は熱心にメモってる。

それから、二本の塔を通り過ぎて、村にたどり着いた。沢山の村人、間違った。ゾンビが歩いていて。

「おい、魔王、ゾンビが魔王の村なのか？」

「いや、彼らは、死体をよみがえらせて、村民として生活させている。ここはな、転生プロジェクトなんだよ、人間が死んだら、まずは私が蘇らせる、最初は、ゾンビにして、次にべつの生き物にしていく、彼らは喜ぶよ、それぞれ訓練作業があるんだよ」

「お前は神様か」

俺の突っ込みに彼女は微笑んで。

「よく言われるよ」

「神様じゃねーだろ、どこに腕もげた、男が血流しながら、訓練するんだよ」

「ここにあるぞ？ みんな、畑作業してるんだよ」

「あそこにいたっては自分の頭を埋めてるぞ」

「彼は、マイソーという名前だね、いつも自分の頭を生めて、掘り返している」

「単なるバカじゃないか」

「いや、マイソーなりの美学だよあれも訓練だ」

「どこに自分の肉体を埋めるバカがいるんだよ」

「きみはピーチクうるさいな、黙って付いてきなさい」

「はい、黙らせて見る」

俺はゾンビの村を通り過ぎた。しばらく、巨大な川が見えた。川で泳いでいるのは、頭だけだった。

突っ込まない突っ込まない。

「ここは、ヘッドヘヤーの川だ、頭だけになって訓練する場所よ、頭の名前をヘッドという」

「そりゃ、無茶苦茶だ」

「この修行が大事なんだよ、これを通り越えた先に、本当の体が待っているよ」

そして、たどり着いた、巨大な村では。

イノシシが歩いていたり、豚が歩いていたり、馬が歩いていたり、牛が歩いていたり、虎が歩いていたり。

「ここは動物の王国か！」

当たり前の突っ込みである。

「大丈夫、安心して、彼らは、三つ子なんだ」

一人のがきんちよに説明している魔王、俺は途方にくれて微笑んだ。これが魔王ジョークか、どこにこんなそくりな三つ子がいるんだよ。

「ここは序の口さ、この村を通つたらばら色が待ってるよ」

「まだあるのか、心臓が爆発しそうだよ」

「まあ、あんしんしろ、ここから先は屈強な戦士でも驚くところだからな」

そして、最初の城門にたどり着いた。そこには、完全にありえない獣がいた。

「ケルベロスじゃねーか」

三つの頭を持つ獣がいた。

「かれはケロちゃんだ」

「そうか」

「うつつケロです」

「最近便秘気味だぜ」

「なんだか星が」

三頭が同時にしゃべった。

彼らを見つめて城門をくぐると、骸骨の戦士たちが歩いていた。ために一人の手首を取ってみた。動いた。気色わるい。

「お前何する、このビクトリー戦士になんのようにゃ」

「彼はビクトリー伯爵だよ、元王国軍で、殺されたんだよ、私が殺した」

「そうこやつのせいだな、まあいい、いくぞてめーら」

ガイコツ騎士団が立ち去った。

そして、にぎわう城下町、ガイコツだらけ。そして、獣だらけ、次に獣人だらけ、魔人もいる。

「一応説明しておくが、魔人は転生者ではない、ちゃんとした生き物だよ、ウルクーダたちがそれだな」

「なるほどな」

「彼らは、最初から、身分があるがね、魔王の領域にも色々あつてね、ウルクーダたち狼族の王国が彼らを裏切ったのは知っているが、魔王としては、どうにもできないんだよ、いろいろな族派に分かれて、対立している、私でも統治でてきいない」

「その力があればできるとおもうけどな」

「支配はできるが、平和はない」

「確かにな」

「これから四天王にあわせるが見るかい？」

「見ておこう」

そして、俺たち三人は四天王に会ったのである。巨大な城、もうドラキュラでも出そうなくらい暗い城で、四天王が食事していた。

「彼は、ビックリージョーズだ」

そこにはサメ人間がいた。

まあ、驚かないが。

「次は、売ってくださいだ」

「は？」

そこには誰もいなかった。椅子を見ると、チビがいた。それも小さい、俺の元の大きさと同じくらいだろうか？

「売ってください、チビ族の一種だ。これでも魔法を使える」

彼はこちらを見てにやりと笑った。

「そして、彼女が、サキユバスだ。男性を誘惑する」

そこにはデブの女性がいた。どうやって男性を誘惑するのか興味があった。

「最後の彼女が、気難しい、ドッペルゲンガーだ」

そこには、魔王そっくりな人がいた。

「彼女はわたしを真似て何度も殺そうとするが、まあ、気にするなということ、我が王国の紹介は終わった。どうじゃ？ 小説のねたになるか？」

「「なります」」

「こんなわけの分からない王国もうきたくない」

「そうかなら帰るがいい、送らないぞ、お主ワープ使えるじゃろう？」

「そうだけど」

「なら、グッバイだ。私はこれから食事にする」

「はい、そうですか」

もう疲れた突っ込みすぎて。

「じゃ、お仕事お疲れさまです」

四人が立ち去った。

というか。

「もともと四天王なんていなかったんでしょ」

「やっぱりばれた？」

「ばれるわ」

「一応彼らはいてる席に座らせただけ、四天王は、今、他の国で闘ってます。彼らはその部下たちね」

「はあ」

「まあ、機会があつたらあわせてあげるわ」

「そのときはめっちゃ突っ込むからな」

「そのときはお願いするわね」

そして、帰ろうとしたとき。

三人が同時にワープした。ワープした先では、俺を目撃した図書館から帰る人が、勇者が使うワープ魔法だと勘違いして人騒動あった。

6 分身ネタギレ（後書き）

ちよつと魔王の王国はぐろかったかも次から元通りですので安心してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0934x/>

本まみれの哀れな転生者

2011年10月9日20時31分発行